

「地すべり論」 解説

(追 補 版)

布 施 弘

1999年5月

「地すべり論」解説

目 次

まえがき（1998年7月28日）	3
まえがき2（1999年5月15日）	6
「地すべり論」解説	
1 はじめに	7
2 地すべりの本質	8
3 地すべりの発展	17
3-1 岩盤での地すべり	18
(1) 移動地	18
(2) 不動地	21
3-2 崩土での地すべり	25
3-3 地すべり粘土での地すべり	30
3-4 地すべりの発展	32
3-5 移動形態の発展	33
3-6 有機的全体としての地すべり	35
4 現実のものとしての地すべり	36
4-1 岩盤での地すべり	37
4-2 崩土での地すべり	41
4-3 地すべり粘土での地すべり	44
4-4 条件	45
4-5 地すべり地形	48
5 地殻表層物	49
5-1 岩盤	50
5-2 崩土	51
5-3 地すべり粘土	52
5-4 地殻表層物と地すべり	52
6 地すべりの消滅	54
7 おわりに	56

まえがき

「地すべり論」を著わしてからすでに20年近い歳月が経過しようとしています。あの頃は、科学とは何か、そして地すべりとは何か、を真剣に模索し初めてから10年位が経っており、マルクス、エンゲルスにすでに完全に傾いておりました。そして、「地すべり論」は、その題名からも推測できるように、マルクスの「資本論」からの強い影響の直撃を受けながら書かれたものです。

しかし、当然のこととはいえ、「資本論」を十分に理解できなかったために、「地すべり論」を噛み砕いた表現で著わすことができませんでした。まことに難解な書物になったようです。「学術論文であるなら、読者に読ませるように努力するのが著者の責任である。もっとわかり易くしたらどうか。」そのように薦めてくださる方もおられました。もっともなことです。

ですが、私はそれを頑なに拒みつづけてきました。「地すべり論」で2つの主要な目的を達していたからであります。第一に、科学とは、理論とは何か、そのことの答えをこの「地すべり論」で明らかにすることであり、第二に、そしてもっと重要な目的は、地すべり研究についての私の確固としたスタート台を築くことでした。このスタート台は、実践のための指針として、「地すべり論」の最後に述べられています（この解説書では52ページ）。これらの目的を達した以上は、古人の言い方を借りれば、ねずみの齧る批判に任せておいてもよかったです。

これらの事情は、いまでも変わったわけではありません。ただ、わたしの身の周りの環境が変わってきました。その中で、たまたま手にした本がヘーゲルの「精神現象学」でした。それをきっかけにして、久しぶりに思索する環境になったのです。それとともに、「地すべり論」のことが気にかかりだしました。「地すべり論」をもっとわかり易くすべきだ、というのが、私の娘からのかねてからの強迫でした。

そんなことで、ようやく重い腰を上げることにしました。「地すべり論」をわかり易くしてみよう。とはいえ、「地すべり論」をわかり易くすることには、いまでも臆病であります。臆病にしている最大の要因は、マルクスを十分に理解できているとはいえないために、「地すべり論」の理論だてを壊すのではないだろうか、また、使われていることばの厳密な定義をわずかでも曇らせることになりはしないであろうか、ということでした。

そこで、解説の方針を次のように建てました。

- 1 「地すべり論」原文の段落ごとに解説をつける。そうすることで、理論の進行方向（理論だて）が変わることを防ぐことができる。また、解説は、原文を読んだあとに読んでくれるものとかってに期待する。そうすることで、不十分な解説の責任を回避する。
- 2 わかりやすさを優先させるために、ことばの厳密な定義を多少は犠牲にしてもやむ

をえない。「地すべり論」を難解にしているもう一つの原因は、ことばの厳密な定義とその使い方にこだわっているからである。厳密な定義と使い方は、同時に引用している原文にあたってほしい。また、解説文はかならずしも正確な文意を表わしているとは限らない。解説文によることなく、原文にあたっていただきたい。

- 3 原文は小さ目の文字（9ポイント）で、解説は大き目の文字（10.5ポイント）で区別する。
- 4 先人の研究成果の引用部分等は、理論の進め方に無理がない限り、省略する。省略するときは、（原文省略）あるいは、……… で表す。
- 5 原文から引用した段落の位置を明かにするために、原文のページと左右どちらにあるかを、(9L)、(11R-12L)のように表す。
- 6 あえて解説する必要がない段落は、原文を引用するだけにとどめる。とくに後半では、ほとんど解説する必要がなくなるであろう。

このようにして作業を進めた結果、原文に、緊張を欠いた部分や言いまわし方が必ずしも適切でない部分などが見つかりました。でも、いまとなつては、どうすることもできません。明かな誤字脱字以外は、当時の原文のまま引用することにしました。

ところで、「地すべり論」は、題名のとおりに、理論の書であります。地すべりを一步一步認識していく、その過程を示した書であります。この点で、現代で普通に行われている学術論文の記述の仕方とは、まったく異なります。たしかに、「地すべり論」は、他の現代科学と同じく、客観的实在を直接の対象にしています。しかし同時に、「地すべり論」は、その対象を主観的に認識する過程を記述しているのです。もちろん、それは、客観的实在を完全に承認した上で、それを主観的に反映しているのです。ですから、この「地すべり論」のどこであつても、たとえば第2章や第3章のように純粹に抽象的なカテゴリーでの考察が行なわれているところであつても、いつでも現実的、具体的な地すべりが表象されているのです。

とはいえ、客観的实在はすでにそれだけで全一的であります。それを認識し記述するには、すべてを一度に示すことができません。順番を追いながら、ひとつひとつ記述するしかないのです。そのため、「地すべり論」は、低い段階の認識からはじめて、より高い段階の認識にいたるまでの全過程が、そのとおりに示されているのです。途中のどこかで躓くと、それ以降のことが理解できないままになります。そして、最後にいたってはじめて、地すべりのすべてが認識されるのです。

よく巷間で「資本論」は後ろから読め、といわれます。全体を理解した上で、つまりより高い段階の認識に達した上でなら、より低い段階の認識を得られやすい、ということです。「地すべり論」も（「資本論」になぞらえるのは極めて僭越ではありますが）、最後まで通読した後、改めて読み直すのがいいでしょう。「読書百篇、意自ずから通ず」です。でも、記述の仕方としては、そのやり方は、間違いです。

また、「地すべり論」は難解である、と申し上げましたが、ほんとに難解なのは、前半（第2章と第3章）だけです。そこでは、自然形態を捨象された、いいかえれば抽象的な地すべりそのものが対象になっているからです（とは言っても、第1に、抽象的なものは現実に存在していないから抽象的なものであるのではなく、逆に、あまねく存在しているからこそそれは抽象的なものなのですし、また第2に、そこでも、先に述べておいたように、いつでも現実に存在している具体的な現象が表象されているのですが）。そして、ここにこそ「地すべり論」の真髓があります。

後半は、ほとんど原文を引用しただけです。

では、地すべり論にご案内いたしましょう。

布 施 弘

1998年7月28日

まえがき 2

昨年7月28日に最初の解説を著しました。そのときはそれで良いのだ、そう思っていました。しかし、読み直しているうちに、あちこちで不備が見えるようになりました。校正ミスの訂正のほか、まだまだ解説しなければならない部分等が見つかりました。

たとえば、先の解説の4ページ目で、原文では「移動地の考察に際しては、……移動量が問題になる。」といいながら、解説ではその質的な側面である移動だけを問題にしています。移動が問題になるときに、なぜ移動量が問題になるのか、ということに触れていなかったのです。

また、第3章以下では形態規定が重要な役割を担っているのですが、同時にこの形態規定が本文全体を難解にしています。そこで、形態とその本質である自重との関係、また形態と移動地等との関係に若干の説明を試みました。とはいえ、新しい解説のその個所（11ページ）で述べていますが、「これからの論述の中で明らかにされる事柄を予め示すのは、」本来、避けるべき記述の仕方です。「それでも、今後の理解を少しでも容易にするため」に挿入しておきました。

そのほかにも全面的に見直しを行い、解説を追加したり、解説文の語句を訂正しています。第2章と第3章は、解説文（10.5ポイントの文）だけを拾い読みしていても、大筋を把握できるのではないのでしょうか。第4章以降は、あまり解説していません。その必要がないでしょうから。

また、明かに反則ではありますが、昨年7月28日の「まえがき」にも若干の説明を追加したり、段落の切り替えをしております。それは、よりわかりやすくしたい、ということのほかには他意はありません。

それでも、やはり難解です。原文を読み直すたびに、何か新しいことが見えるのです。ときには、以前には見えなかった理論的な筋書きが、急にパッと見えたり、またあるときには、それぞれの章や節が置かれている位置の確かさに驚かされます。

いずれ時間をかけながら、もっと分かりやすくしてみたいものです。そのときは、たぶん、地すべりそのものから距離を置いて、方法論の側面からの説明あるいは解説が主体になるでしょう。

布 施 弘

1999年5月15日

「地すべり論」 角澤 説

1 はじめに

原文の第1章では、地すべりの認識の歴史について述べている。地すべりの認識の歴史を通観することで、それぞれの段階での調査や対策の現実的な基礎を明らかにし、さらに、今後の対策と調査そして研究の方向を明らかにしている。

地すべりの認識は、地すべり地を農業に利用することで始まった。初めは、そこに農業に適した緩い傾斜面と豊富な水があったということだけで、それをそのまま利用していた。地すべりが山間地での農業を可能にした。農業が発達するにつれて、地すべりが農業を阻害するようになった。こんどは地すべりが山間地での農業の桎梏となったのである。そのため、地すべりを抑止するように要請されるようになってきた。

農業の発達の程度は、その時々社会経済にその基礎を置いていたのであるから、その発達は歴史的必然であった。そして、このような社会的な要請に押されながら、地すべりに働きかけることで、地すべりへの認識がますます深くなってきた。(原文省略)

地すべりの認識の歴史が、このように農業の発達という現実の歴史を基礎として展開されている。いいかえれば、農業の発達が、地すべりの認識が発展する現実的、実践的な基礎であった。

その結論の部分を次ぎに示そう。

より発達した農業は、ますます完全な地すべりの抑止を要請する。ところが、他面では、地すべりの完全な抑止、つまり地すべりの人為的な消滅は地すべりそのものを知ることなしには不可能である。それゆえに、より発達した農業は、今度は調査と研究との統合を要請する。とはいえ、この統合は先の未分化の状態に戻るのではない。これは、より高い次元での再統一である。調査は研究に指導され、研究は調査と対策によって検証されるのである。(3R)

より発達した農業は、ますます完全な地すべりの抑止を要請する。そこでは、地すべりそのものを知る必要がある。地すべりの調査と研究とは未分化のままで発生したのであるが、現在では、それらは互いに別のものとして発達している。しかし、それらは社会的要請に押されて、いずれは再び統合される。とは言っても、それらは渾然一体となった状態に戻るのではない。そこでは、それらはそれぞれの独自性を堅持しながら、調査は研究に指導され、研究は調査と対策によって検証される。

次に、「地すべり論」が対象にしている内容を予め述べている。

個々の地すべり対策には、個々の地すべりを知らなければならない。個々の地すべりを知ることとは、それが一般的なものの現象したものとして、つまり一般的なものであると同時に特殊的なものであ

ることを明らかにすることであり、さらに、他の同様に特殊的なものとは区別される個別的なものであることを明らかにすることである。そのためには、まず一般的なものを知らなければならない。一般を知ることによってはじめて、特殊を明らかにすることができるのであり、ついで、その特殊が現実のものとして実現する条件を明らかにすることによって、他とは区別される個別のものを明らかにすることができるのである。(3R)

「地すべり論」は、地すべり一般を明らかにする。地すべり一般とは、すべての地すべりに共通する地すべりであり、それゆえに、抽象的な地すべりである。「地すべり論」はすべての地すべりに通用する理論である。それは、抽象的であるがゆえに可能なのである。しかし、同時に、抽象的であるがゆえに、それを具体的な個別の地すべりには、そのままでは適用することはできない。そうであっても、まず、地すべり一般を明らかにする必要があるのである。

では、地すべりを明らかにする、地すべりを知るということは、どういうことであろうか。

地すべりを知るということは、地すべりを土質工学や地質学・地球物理学あるいはその他の既存の学問の材料として把握することではなく、ましてそれらの法則で解釈することではない。地すべりを知るということは、地すべり独自の法則、つまり地すべりの発展法則を明らかにすることである。とはいえ、この過程では、既存の学問の概念や手段の助けを必要とすることは当然である。(3R)

地すべりを知るということは、地すべり独自の法則つまり地すべりの発生、発展および消滅の法則、いいかえれば地すべりの発展法則（内的必然性）を明かにすることである。そしてここでの対象は、地すべり一般である。そうであるから、それを具体的な地すべりに適用するときは、その地すべりが実現（発生、発展および消滅）する（つまり、法則が己を貫徹する）条件を、その地すべりに則して具体的に明らかにする必要があるのである。

また、この法則を明らかにする過程では、それが現実の自然現象にその基礎をもっているにしても、既存の学問の概念や手段の助けを必要とするのは当然であり、それは「新しい理論というものはすべてそうなのだが、……、さしあたりは、すでに存在している思想上の素材に手がかりをもとめなければならぬ」(エンゲルス『空想から科学へ』国民文庫55ページ)ことを示している。

2 地すべりの本質

「地すべり論」の本論は、いきなり地すべりの本質から始まる。

弁証法的認識論では一般に、認識は、対象の弁証法的構造を反映して、現象論的段階から始まり、本質論的段階（あるいは実体論的段階ともいう）を経て、概念論的段階に達する、といわれている。そして、概念論的段階は次の現象論的段階に転化する。その発展過程は、ちょうど螺旋階段を上るような過程を経る、ともいわれている。そして、この過程

を機械論的に固定してはならないのはいうまでもないであろう。

地すべり論は、本質論的段階から説き起こされている。しかし、だからといって、筆者に現象論的段階が無かったと理解すべきではない。昭和37年の暮れに始まったという松之山地すべり（新潟県東頸城郡松之山町）をはじめとする多くの地すべりについての直接の経験、また、各種の文献に紹介された多くの地すべり報告からの、言うならば間接的な経験、日常的とさえ言えるそれらの無数の経験があつて、そこから地すべりの本質を抉出しているのである。

それでは、ものの本質とはどういうものであろうか。たとえば、果実としてのリンゴを考えてみよう。リンゴの本質、あるいは同じことだが、リンゴ一般は、すべてのリンゴに共通するものである。よくできた略画には、あれこれの具体的に実在するリンゴの大きさや形、さらには色や特有の香りさえも捨象されている。それにもかかわらず、それがリンゴを描いたものであることを認めることができるとき、そこには、リンゴ一般が描かれているのである。

地すべりの本質は、すべての地すべりに共通するものである。**すべての地すべり**というとき、当然ながら、時間的には、現在の地すべりだけでなく、過去および未来のそれをも含んでいる。また、地理的・空間的には洋の東西を問わない。**すべての地すべりに共通するもの**というとき、多くの人は、地下水の存在を指摘する。筆者は「地すべり論」を構想している当時、地すべりを調査、研究している何人もの人たちにそのことを質問して廻った。彼らは一様に、地下水の存在を指摘した*。しかし、ものの本質としての共通するものは、そのものの内にあるものであつて、外から持ち込まれたものではない。地すべりの発生に地下水が関与していないこともありうるのである。

事実、昭和22年頃の、晴天が一週間以上も（たぶん、ひと月も）続いた8月のある日の正午過ぎに突然に（というのは、その崖の下の畑で農作業をしていて命からがらに難を逃れた人が、何の前兆も無かったと言明している）発生したという地すべり（新潟県能生町。それ以後、そこは「朝崩れ」と称されている）がある。現地調査時にはその難を逃れた本人に案内していただいたのであるが、その人は、地すべり直後の急崖（つまり頭部滑落崖）には水の噴き出しも、濡れている様子さえもなく、崩れた岩塊は乾いていた、と断言している。この証言が正しい限り、地下水は、どんなに多くの地すべりの発生に関与しているにしても、それでもなお**すべての地すべりに共通している**わけではないのである。

* 後に、ただひとり、高澤正樹氏だけが、すべての地すべりに共通するのは移動することである、と指摘した。同氏は農民文学者として地すべりに興味を持っており、またジャーナリストではあるが、地すべりを調査、研究しているわけではない。また、同氏は朝崩れの事例を承知していなかった。

地すべりは、傾斜面の一部が移動する現象である。地すべりは、その移動を観測する者から独立した客観的な対象であり、ただ、地殻の表層部を構成している物（地殻表層物）が移動するものとして認められるだけの現象である。ここでは、このような移動するものがいつの時代にどのような形状のすべり面を

もってどの位の深さで移動したか、あるいは移動しつつあるか、問題ではない。(4L)

地すべりの最初の定義として、それは斜面を構成している表層の物質（以下、決して適切な用語ではないが、当時の用語を踏襲して、「地殻表層物」ということにする。）が移動するものであることを指摘している。世界各地でこれまでに何千回、何万回と発生してきた地すべり、それらは、すべて地殻表層物が移動するものである。現在は移動していないとしても、それが地すべりである限り、過去には移動していたのである。だから、時間を捨象してみれば、現在および過去の地すべりは、すべて移動することで、それが地すべりであることを表現しているのである。このことを未来にまで敷衍することは許されるであろう。だから、これが、すべての地すべりに共通するもの、本質である。

ここでは具体的な地すべりのもつ諸属性（いつの時代にどのような形状のすべり面をもってどの位の深さで移動したか、あるいは移動しつつあるか等々）のうち、すべての地すべりに共通する属性は、たんに移動することであることを示している。いわば、他の諸属性を捨象しているのである。ここでは、地すべりの規模の大小も無視されている。近年になって喧伝されている、いわゆる大規模地すべりであるかどうかさえも、ここでは、どうでもいいこととして捨象されているのである。

地殻表層物は化学的にも物理的にも、したがって質的にも量的にも、いろいろの属性をもつ物として具体的に存在している。このような物は、これらの諸属性の寄せ集まりとして具体的に存在しているのであり、したがって、どのような属性をとりあげても地殻表層物でありうる。そのような地殻表層物が移動することによって、それは地すべりとしての実を示す移動地となる。だから移動地はいろいろの属性をもったままで移動地である。そして移動地の移動は、移動地の性質によって、したがってその諸属性によって規制されているのであるから、移動地なしには存在しない。移動地のこのような性格は、その移動をもたらす自重の大きさにはかわりがない。移動地は、それが現実のものとして実現するには、ただ、移動するものとしての面でのみ考察されているからである。(4L)

まず、移動するということはどういうことであるかを分析している。そのはじめに、移動の実体である地殻表層物について検討している。現実に移動する地殻表層物、つまり移動地は、色や形、重さ、硬さ、傾斜度等々のいろいろな属性を持っており、生じた地すべりの移動範囲や移動速度等々は、その移動地のそれらの属性によって規制されている。そうであっても、ここでは、それらの属性を捨象して、それがもつどのような属性にもかかわらず、たんに移動するものとしてだけで考察の対象になっているのである。

ところが、移動地の考察に際しては、つねに、どの程度移動しているか、その移動量がどれほどであるかという、量の側面、移動量が問題になる。移動地の移動量は移動しているもので、あるいは自分自身で表現することはできない。それを表現するのは、自らは移動していない地殻表層物—不動地—だけである。だから、不動地は、移動地の移動量を表現するものとして現れる。そのかぎりで不動地が表現しているものは、そのいろいろの現物形態にもかかわらず、移動地の移動だけである。(4L)

ある物が移動しているというとき、移動しているもの自身であるいは他の移動しているもので、その移動量を表現することができない。それとは別の、たとい相対的であろうとも、移動していない物がなければならない。地球は移動している。しかし、それは、地球だけで、移動していることを示すことはできない。また、電車と同じ速度で平行して走っている自動車からは、その電車は動いていない。移動する速度が互いに異なれば、移動していることは示される。しかし、そこでも移動量は示されない。動いている電車の移動量は、動いていない山や川や林、止まっている自動車等々によって示されるのである。また、電車がある時間を経過した後では出発した地点とは異なる地点に到着することでその移動量が表現されると言っても、事情はまったく変らない。地すべりの移動地であっても、地すべり以前にはそれに接していた地殻表層物の一部が移動しないで元の位置に残っていることで、そこからの移動であることが表現され、同時に移動量も表現されるのである。だから、移動地の移動を表現するものとして、自らは移動していない地殻表層物—不動地—が必要なのである。不動地は、移動地の移動を表現するものとして現れる。

実際にある物の移動が問題になっているところでは、同時にその量的側面も問題になっている。というよりも、移動の現実的な表現として、それは質的表現とともに量的表現をもっているということである。移動地の移動を表現している不動地が同時に、移動地の移動量をも表現しているのである。

先に見たように、移動地はそのいろいろの具体的な属性を捨象されて、移動するものとしてだけで考察の対象となっている。不動地は、移動地の移動を表現するという限りでは、同様に、そのいろいろの具体的な諸属性（現物形態）を捨象されて、移動地の移動だけを表現するものとしてだけで、考察の対象となっているのである。

このように、地すべりの考察には、移動地と不動地とが互いに別のものであると同時に不可分のもの、両者で一つの現象を表現するものとして現われるのである。

移動地の移動は、いろいろの現物形態をもつ不動地によって表現される。この関係にあつては、移動地は、どのような不動地によってその移動を表現されるかによって、いつも異なる移動表現をもつのである。たとえば、泥岩や砂岩などの岩盤の不動地は、それに対応する岩盤での地すべりの一過性の移動を表現しており、地すべり粘土を現物形態とする相対的な不動地は、継続的な移動を表現している。それゆえに、この移動表現は、偶然的なもの、純粹に相対的なものであるように見える。(4L-R)

これまでに移動地と不動地とを別々に考察し、それぞれがいろいろな現物形態を持ちながら、なおそれらを捨象したものとして、それぞれが移動するものとその移動を表現するものとして現れていることが示された。これからは、これら両者の関係を考察する。

まず、これらがあれこれの具体的な地すべり地での関係ではなく、一般に不動地が移動地の移動を表現している、という場合を取り上げている。

これまでに地すべりを起こしたことがない岩盤に、ある日、地すべりが生じたと想像してみよう。岩盤に亀裂が生じ、一方は移動地となって崩れ去る。そして、他方は、元のま

まに残ることで、そこからの移動であったことを表している。岩盤に地すべりが発生したときから、その移動地はすでに岩盤ではなくなる。移動地は岩盤やその他の現物形態にかかわらず、移動地としてだけ現れているのである。しかし、その移動を表現している不動地は、元の岩盤のままで移動地の移動を表現している。

つまり、その急崖（移動地から見れば、いわゆる頭部滑落崖や側方滑落崖）は、移動地がかつてはそこにあったことを示している。そしてこの岩盤の不動地が表現している移動は、岩盤での地すべりの移動である。同時に、その移動地はすでに岩盤ではなくなる。したがって、この移動表現は、一過性である。

また、以前から繰り返し生じていた地すべり地で、その一部の斜面で新たに地すべりが生じたときは、地すべり崩土の一部が移動し、それに接していた他の地すべり崩土が相対的な不動地となって、そこからの移動であることを表現する。しかも、この地すべりは、一時的な安定期を経たあとに、再び地すべり崩土での地すべりとして繰り返し発生する。岩盤での地すべりが一過性であったのと違い、この地すべりは間欠的に繰り返し生じる。したがって、地すべり崩土の不動地は間欠的な移動を表現しているのである。この表現では、新たな地すべりが発生するたびに、新たな崩土を不動地にするのであるが、それはここでは問題ではない。ここでは、崩土が相対的に不動地となって移動地の移動を表現しているという事実が指摘されているのである。

厚い地すべり粘土での地すべりであっても、事情は上に述べたことに変わりがない。ただ異なるのは、ここではゆっくりではあるが継続的に、あるいは毎年の決まった時期に繰り返し移動しており、地すべり粘土での相対的な不動地（つまり、移動を表現している地すべり粘土）は継続的な移動を表現しているのである。

このように、どのような現物形態（岩盤、地すべり崩土、地すべり粘土等）の不動地で移動が表現されるかによって、一過性の移動や間欠的な移動、あるいは継続的な移動が表現されるのである。また、その他の中間的な現物形態の不動地での表現であっても、事情はまったく変わらない。ただその都度、新たな移動表現が付け加えられるだけである。それゆえに、この移動表現は、どのような不動地の現物形態で表現されるかによって、いろいろな表現を持ち得る。だから、この移動表現は、偶然的なもの、純粹に相対的なものであるように見える。

さらに、ある不動地がある移動地の移動を表現しているという関係にあつては、その不動地にもそしてその移動地にも、どちらにも属さない第三のものでかつ両者に共通するものがそれぞれにふくまれていることを意味する。そのような共通のものがなくては、自立しあう二者の間にはいかなる関係も生じえないからである。(4R)

次に、ある不動地がある移動地の移動を表現している場合をとりあげている。このような不動地と移動地とは、これらが互いに自立しているときは、このような表現関係に入ることができない。先の例でいえば、電車の動きは動いていない山で表現されるとはいえ、

その電車とその山とが空間的にまったくかけ離れている（互いに自立している）ときは、後者は前者の移動を表現することができない。山手線（東京都内）の電車の動きをアルプス山脈で表現できない。だから、両者がある表現関係にあるということは、その両者に、どちらにも属さない第三のものでかつ両者に共通するものがそれぞれにふくまれていることを意味する。電車の動きが山で表現されるとき、両者は同一の空間を占めているのである。

この共通のものは、地殻表層物の色や形あるいは土質力学定数といった自然的属性ではありえない。このような自然的属性は、地殻表層物を具体的なものにし、さらに地殻表層物の移動を規制することによってそれを移動地にしていたのである。ところが、移動地と不動地との関係を明白に特徴づけているのは、どの移動地ももっている属性、まさにこのような具体的なもの、自然的属性の捨象なのである。(4R)

ある斜面の移動地は、その移動地のさまざまな自然的属性に従って、規制されて、移動している。しかし、ある不動地がある移動地の移動を表現しているという関係（移動関係）にあつては、これまでに述べてきたように、移動地はただ移動するものとしてのみ現れている。移動地が持っている色や形等々の自然的属性は、捨象されているのである。また先に示したように、互いに自立する不動地と移動地とは、両者に共通のものがなければ、一つの関係、移動関係に入り得ない。だから、移動関係にある不動地と移動地には共通のものがあるのであり、かつ後者の自然的属性が捨象されて移動関係にあるのであるから、両者に共通のものは、少なくともこのような自然的属性ではないことになる。これらの移動関係で明らかになるのは、むしろ、これらの自然的属性の積極的な捨象なのである。

地すべりがその移動地の諸属性によっていろいろに区別され分類されている（たとえば、植村、1974; 1975）ということは、それらの移動地がいろいろに違った質をもっていることを示している。しかし、それらの移動を表現している不動地にとっては、それらはたんにいろいろの移動しているものであるにすぎない。この関係にあつては、それらの間の質的な違いは一切捨象されているのである。このように質的な違いを捨象された移動地は、ただ移動するものであり、自重の現象形態としての属性をもっているだけである。(4L)

移動地はいろいろの違った質を持っている。多様な質の移動地がある。それを基準にして、いろいろに分類されている（例えば、その移動速度を基準にして、突発型地すべりと粘潤型地すべり等々）。しかし、そうであっても、不動地から見れば、それらはたんにいろいろの移動しているものであるにすぎない。このように質的な違いを捨象された移動地は、ただ移動するものである。そして、移動するというのは、自重の運動形態のひとつである。したがって、それは自重*の現象形態であるという属性を持つだけである。

* 一般には、自重というよりも重力といった方がわかりやすいであろう。しかし、重力というとき、そこには地球の質量からもたらされた力という、他からの作用を暗黙のうちに引き入れることになる。また、重力というとき、個別のものが持っている属性としての質量（ここでは自重）が陰に追

いやられている。移動が必然であることを説明しようとしているここでは、自分自身の内にあるものの、自らの属性としての自重でなければならないのである。

地殻表層物の具体的な構造や密度あるいは硬さ等々の自然的属性は、それが形成される過程で作用した自重の大きさによって規定されている。だから自重は、一面ではそのようなものとして自己を表現しているのである。しかしこれらの自然的属性を捨象しているここでは、物体的な諸構造や諸形態も捨象している。自然的属性を捨象された物はすでにあれこれの具体的な物ではなく、したがって岩盤や崩土あるいは地すべり粘土などの具体的な地殻表層物ではありえない。それとともに、そのような物からは自然的属性をもたらした具体的自重、つまりそれぞれの地殻表層物の形成過程にそれぞれの固有の大きさで作用していた自重も消え去っており、そこに残されているのは、もはや互いに区別されることのない、すべてことごとく同じ自重、抽象的自重だけである。具体的自重は抽象的自重に還元されているのである。かくして、移動関係にあっては、移動地と不動地に共通するものは、抽象的自重である。(4R-5L)

二種類の自重が区別されている。ひとつは、個別の、したがって具体的に存在しているものの重さで表現されるような自重である。これは、地殻表層物のいくらかを切り出してみれば、具体的に何キログラムというように表現される自重（質量）である。地殻表層物が形成される過程では、圧密となって特定の厚さや硬さ等の、諸形態や諸構造となって自己を表現している自重である。これは、その密度に応じた特定の大きさを持った自重であり、他とは区別される自重、したがって、その地殻表層物に特有の具体的な自重である。

もうひとつの自重は、これらの具体的な属性をすべて捨象したときになおそこに残る自重であり、たんに、地殻表層物が自重を持つ、というときの自重である。そしてこれは、すべての地殻表層物が等しく有している自重である。それは、具体的な属性を捨象したものとして、抽象的な自重である。

不動地が移動地の移動を表現しているという関係にあっては、それらの自然的属性が捨象されている。したがって、この関係にある不動地や移動地は、岩盤や崩土あるいは地すべり粘土という具体的な地殻表層物ではありえない。だから、このような自然的属性をもたらした具体的な自重も消え去っている。そこに残されているのは、もはや互いに区別されることのない、すべてことごとく同じ自重、抽象的自重だけである。具体的自重は抽象的自重に還元されて（戻されて）いるのである。かくして、移動関係にあっては、移動地と不動地に共通するものは、抽象的自重である。

ここで、抽象的自重と具体的自重について、別の角度から説明しておこう。

論点は、抽象的自重とは何か、あるいはそもそも抽象的自重というのがあるのか、ということである。

今、50 g のゴムボールと 50kg の鉄球とを同時に斜塔の頂上から自然落下させると想像してみよう。なお、空気抵抗を無視できるように両者の大きさや形状及び表面処理は同じとする。これらを斜塔の頂上から同時に落下させるとき、地面に到達する時間はわずかに

差があるであろう。このときの両者の到達時間の差を問題にすると、それぞれがもっている自重の大きさが問題とされるのであり、それは具体的な自重である。しかし、一方では、両方とも地上に落下するということが重要であって、そのような時間差は程度問題なのだというとき、ここでは、たんに自重を持っているということ、抽象的自重を問題にしているのである。だから、これらを、ちょっと乱暴であるが、数式で表現すると、

具体的自重＝抽象的自重＋具体的な重さ
となる。

具体的自重は、抽象的自重なしでは存在しない。しかし、抽象的自重は、前者なしでも存在しうるのである。だからここでは、両者は、たんに互いに異なるものとして、差別的に区別されているのである。

ところで、このような抽象的自重だけをもつ地殻表層物は、すでにたんなる対象性以外の何ものでもなく、無差別の自重の、質点としての凝固物以外のなにものでもないのである。このような物が自己を表現しようとするときには、他者との関係によって表現するしかない。それゆえに、このような抽象的自重が自己を表現するには具体的な地殻表層物を表現手段とするほかないのである。つまり、抽象的自重が物質化したものとして、それは移動地なのである。(5L)

先に、移動関係にある移動地と不動地に共通するものは、抽象的自重であることを指摘した。それは、移動関係にある移動地と不動地とを分析することで得られた結論である。ここでは、そのように分析（抽象化）することで得られた抽象的自重が、どのようにして具体的な移動地であるかを説明しなければならない（統合化）。

地殻表層物は、具体的な諸属性を持っていればじめて地殻表層物として認められる存在である。しかるに、ここでは抽象的な自重だけを持つものとして対象となっている。それはすでに地殻表層物というよりも、無差別の自重の、質点としての凝固物以外のなにものでもないのである。そのようなものは、それだけでは具体物として存在することはできない。それゆえに、無差別の自重（抽象的自重）は、具体的な諸属性を持って存在している地殻表層物を己の表現手段にするしかないのである。具体的な他者（具体的自重）を己の表現手段とすることではじめて、自己を表現できるのである。だから、抽象的自重が具体的な地殻表層物に表現したとき、その地殻表層物が移動地なのである。

これまでは地すべりを分析して、移動地と不動地、そしてそれらに現象している自重を明らかにしてきた。ところが、地すべりでなくても移動地であり得る。土砂と水の混合物が移動したもの、つまり、土砂と水の混合物に自重が現象したものがあ。土石流である。また、自重が地殻表層物に現象したものとしても、地すべり以外のものであり得る。クリープである。原文では、地すべりと土石流そしてクリープについて、同一性ととともに差異を示している。（この項の原文は省略する）

以下に、この章を終えるにあたって、これまで明らかにしてきた内容を整理し、要約している。原文を掲載するだけで、解説の必要は無いであろう。

地すべりは、地すべりとしての実を示す移動地と、その移動地の移動を表現する不動地とから構成されている。そして、それらのくわしい分析は、両者に共通しながらそれらのどちらでもない実体としての、地殻表層物の抽象的自重を明らかにした。地すべりの移動地は、移動地と不動地との関係にあつては、ただ抽象的自重が地殻表層物に凝固した姿であつた。

地すべりの移動地でなくても抽象的自重の表現形式であることがありうるし、地すべりでなくても自重の表現形式は存在しうる。しかし、それぞれの後者でなしにそれぞれの前者であることはありえない。抽象的自重、つまり無差別の自重の表現形式は土石流として、また自重の表現形式は地層のクリープとして、それぞれに自立しうる。しかるに、地すべりの移動地に表現されている地殻表層物の抽象的自重は、地殻表層物の実体であるにとどまらず、移動地と不動地との実体であるのであり、また、地すべりは抽象的自重の表現形式としての移動地であるにとどまらず、具体的自重の表現形式としての不動地との統一である。つまり、それぞれの前者はそれぞれの後者の一面であるにすぎず、それぞれの後者はそれぞれの前者だけでは規定されず、はみ出ているのである。

地すべりの考察に際しては、移動地はただ移動するものとしてだけに認められ、不動地はただ移動を表現するものとしてだけ現れた。同様に、地すべりの実体としての自重も、一面では、それぞれの地殻表層物に固有の、具体的に規定された形態での自重、具体的自重として認められ、他面では、移動関係にあつては、どのような移動地にもそして不動地にも表現されている自重、したがって、無差別の、抽象的な自重として現れた。

具体的な自重はその中に抽象的なものをふくまず、抽象的自重はあくまでも抽象的なものとして具体的なものをふくまない。これらは、互いに他者をふくまないものとして、互いに差別的に区別されているのである。(6L・R)

上の段落での最後の3行（原文では、4行）は、同時に次の章への準備（移行規定）になっている。ここでは、2つの自重はたんに差別的に区別されているだけであつて、不十分な認識である。だから、これからはより高い段階に進まなければならない。

地すべりの本質は、移動することである。このことから始まって、地すべりの実体としての2つの自重を明らかにしてきた。しかし、このように、地すべりの本質は移動することであり、それは自重の表現形態である、といってみても、それはたんなる定言判断である。宣言しただけである。それは、なんの証明も無いままである。だから、これから自分自身を証明する旅に出なければならない。この旅は、ここに述べた本質だけがすべての出発点であり、途中で他の何物をも付け加えずに、具体的に存在するすべての地すべり形態を本質だけから展開（自己展開）することで自己を証明する旅である。逆にいえば、現実が存在し、したがって誰でも眼前に見ることができるすべての地すべり形態をこの本質だけで自己展開できたとき、この本質がすべての地すべりの本質であることを自ら証明するのである。

3 地すべりの発展

この章では、形態規定が重要な役割を演じている。まず、移動地が他者（不動地）によってその移動を表現されている形態、つまり、相対的にその移動を表現されている形態（相対的移動形態）にあることを示し、不動地が移動地の移動と等しい移動を表現している形態（等移動形態）にあることを示している。その上で、それらの移動地と不動地との間の移動表現が発展するのに応じて、その現象形態である地すべりの形態が発展することを明らかにしている。つまり、現実に見る地すべり形態の発展をその本性から説明することで、それらの発展が必然（内的必然）であることを示しているのである。

なお、これからの論述の中で明らかにされる事柄を予め示すのは、先入観を与えてしまうのであり、避けなければならない。それでも、今後の理解を少しでも容易にするために予め示しておけば、相対的移動形態および等移動形態は、それぞれ、移動関係にある地殻表層物の2つの存在形式（形態）であり、自重が地殻表層物を得て表現する2つの形態（表現形態）である。また、それらが現象したものが、移動地と等移動地（移動地の移動と等しい移動を表現するもの、つまり移動関係にある不動地）である。したがって、地すべりが現象している、ということは、その地殻表層物が相対的移動形態と等移動形態という2つの形態に分かれているということであり、さらに、それらの現象形態は、それぞれ移動地と等移動地である、ということである。

地すべりが現象しているということによって、同時に、そこでは2種類の地殻表層物が区別される。ひとつは、自ら移動して地すべりとしての実を示している能動的な形態にある地殻表層物であり、他は、自らは移動せずに他者の移動を表現している受動的な形態にある地殻表層物である。前者は、後者によってその移動を表現されるものであり、したがって相対的に移動している形態、相対的移動形態にある。後者は、ただ前者の移動量と等しい移動量を表現するものとしてだけ現れており、等移動物として機能している。つまり、後者は等移動形態にあるのである。（6R・7L）

先の章では、地すべり一般における構成要素としての移動地と不動地とを明らかにした。この章では、それらの移動関係の発展を述べる。そのためには、それらが移動関係にあるということは、それらがどのような形態にあるかを示している。つまり、移動地は他者（不動地）によって相対的にその移動を表現される形態、相対的移動形態にあり、不動地は移動地の移動を表現する等移動形態にあるのである。

移動地がその移動を表現するには、かならず他の地殻表層物を通して表現するしかないのであるから、同じひとつの地殻表層物が能動的なものであると同時に受動的なものであることができない。同時に同じ理由によって、ある地殻表層物が能動的なものであるときは他の地殻表層物が受動的なものであることを

前提としており、反対にある地殻表層物が受動的なものであるときは、他の地殻表層物が能動的なものであることを前提としている。

これらの能動的なものと受動的なもの、したがって相対的移動形態と等移動形態は、両者でひとつの関係、移動関係を表現しているのであるが、それとともに、その表現における不可分の契機であり、同時に、同じ移動表現における互いに対立する両端すなわち両極に位置する形態である。(7L)

移動地と不動地とがそれぞれ相対的移動形態と等移動形態にあるという関係（つまり移動関係）にあるときは、前者の移動は、後者の現物形態である地殻表層物を媒介にして表現されるしかない。したがって、ひとつの地殻表層物が能動的なもの（移動地）であるときに同時に受動的なもの（不動地）であることができない。同じ理由から、ある地殻表層物が能動的なもの（あるいは受動的なもの）であるときは他の地殻表層物が受動的なもの（あるいは能動的なもの）であることを前提としている。これら両者でひとつの関係（移動関係）を表現しているのであるから、それらが不可分の関係、互いに対立しあう関係にある。

先の章では、移動地と不動地に現象している抽象的自重と具体的自重とは、互いに異なるものとして差別的に区別されるだけの関係であったが、ここでは、それらの表現形態である相対的移動形態と等移動形態とは、対立しあう関係にあるのである。

3-1 岩盤での地すべり

岩盤での地すべりによって、地殻表層物は移動している岩盤（移動地）と不動の岩盤（不動地）とに区別される。(7L)

移動地と不動地とは、地すべりが発生する前から存在していたのではない。地すべりが生起してみて初めて、岩盤の一部が移動地になり、他の部分が不動地になるのである。

そこで、移動地はどのようにしてその移動を不動地で表現されるのか、また、不動地はどのようにして移動地の移動を表現できるのかを検討している。

なお、岩盤というとき、それが泥岩でできているか砂岩でできているか、あるいは透水係数がいくつであるか、どの程度の強度を持っているか等々、これらの自然形態は無視されている。ただ、全体でひとかたまりのもの、それだけで岩盤である。

(1) 移動地

移動関係にある岩盤にあっては、移動地はただ移動するものとして現れ、不動地はその移動を表現するものとして現れる。不動地が移動を表現するということは、移動地の移動量を表現するだけである。不動地は、自ら移動しないことによって初めて、移動地の移動量を表現できるのである。このようにして、不動地は移動地と同じ量的表現を持つことになる。(7L)

これまでは、不動地はたんに移動地の移動を表現するものであった。しかし、移動を表現するということは、その移動量を表現するということである。ここで不動地は移動地の移動量を表現するもの、量的表現を持つものとして現れた。

ところで、不動地はどのような移動地の移動をも表現する。それゆえに、不動地は、どのような移動地とも同じ属性をもったものであることになる。そのような属性は、第1に、どのような自然形態でもなく、第2に、土質力学定数やその他のどのような量的なものでもない。これらの属性は、移動地によって異なっているからである。不動地と移動地とに共通の属性がこのような量的なものでないということは、そこに残るものは、ただ質的に等しいものである。つまり2つの岩盤が移動関係にあるということは、質的に等しいものを媒介にしているのである。(7L・R)

不動地が移動地の移動を表現するとはいえ、不動地はある特定の移動地の移動だけを表現しているわけではない。どのような移動地とも移動表現を持ちうるのである。ある岩盤の不動地は、その岩盤の移動を表現する。同様に、他の岩盤の不動地はその岩盤の移動地の移動を表す。これらの移動地は、それぞれに異なる自然形態を持っており、他の移動地とは互いに区別される。しかし、それらの移動を表現するあれこれの岩盤はたんに不動地としてのみ現れているのであって、互いに区別されない。その限りでは、それは、たんにいろいろに異なった移動地の移動を表現しているだけである。それゆえに、不動地は、どのような移動地とも同じ属性をもったものであることになる。そして、そのような共通の属性は、それぞれの移動地の自然形態が異なっているのであるから、どのような自然形態でもない。

また、不動地がいろいろ異なった移動地の移動を表現しているということは、不動地が、いろいろの移動地がもっているいろいろの移動量を表現しているということである。したがって、両者に共通する属性はこのような量的なものではない。自然形態でなく、量的なものでもない共通の属性は、残るのは質的に等しいということである。それらは、質的に等しいものを仲介にして量的関係にあるのである。

しかし、移動関係にあつては、このように2つの岩盤が質的に等置されるにもかかわらず、一者の移動だけが表現されている。そこでは、移動地は、不動地を自分の等移動物、自分の移動量と等しい量を表現するもの、として相対しているだけである。不動地は、そのいかなる自然形態にもかかわらず、ただそういうものとしてのみ、移動地と等しいものであるからである。他面では、この関係にあつてはじめて、移動地としての独立した表現が与えられる。なぜならば、移動地はただ自ら移動するものであるということで、ただそれだけで、不動地を自分の等移動物とすることができるのである。そこでは、移動地は、不動地がどのようなものであるかにかかわりなしに、独立に、移動地として表現されているのである。(7R)

移動関係にあつては、2つの岩盤が質的に等しいものを共通にしているとはいえ、そこで表現されているのは、移動地の移動量だけである。不動地はいろいろの自然形態を持っているにもかかわらず、ただ、移動地の移動量と等しいものとしてのみ現れている。そこでは、不動地は、どのような移動地とも質的に等しいものとして、移動地とは区別されているのである。そして移動地は、不動地とは質的に等しいものでありながら、なおかつ自ら移動するものであるということで、不動地とは区別されている。だから、移動地は、不

動地がどのようなものであるかにかかわりなしに、不動地とは独立に、移動地として表現されている。

先の章では、移動地は不動地との移動関係にあるものとして、その関係だけで捉えられていた。そこでは、前者は後方で表現されるという、従属的な形で表現されていた。しかし、ここで述べられた関係（両者が質的に等置されているという関係）にあつてはじめて、移動地は、前者とは質的に等しいにもかかわらず自ら移動するものであるという、移動地としての独立した表現が与えられているのである。

移動地と不動地とは、いずれも自重の具体的な表現であり、したがってそれらに凝固している自重は具体的自重である。前者には、その諸属性を規定し、その結果として移動を規制している自重が表現しており、後者にはその現物形態を規定し、そうすることによって移動を表現している自重が凝固している。これらの具体的自重は、明らかに互いに異なるものである。しかるに、移動関係にあつては、移動地に凝固している自重が、不動地の自重に等置されることによって、移動地と不動地に共通の自重、互いに区別されえない抽象的自重に還元されるのである。また、不動地に現象している自重は、ただそれが移動を表現する限りでは、移動地に現象している自重とは区別されえないのである。このように、他の岩盤による移動表現だけが、それぞれにふくまれている異種の自重をそれらに共通の、自重一般に還元するのである。

(7R)

先の移動地と不動地との分析が明らかにしたように、移動地と不動地とは、いずれも自重の具体的な表現であり、したがってそれらに凝固している自重は具体的自重である。前者には、その諸属性（硬さや密度、亀裂の程度など）を規定し、その結果として移動（移動の範囲や時期、あるいは移動量など）を規制している自重が表現しており、後者にはその現物形態（岩盤や崩土など）を規定し、そうすることによって移動を表現している自重が凝固している。これらの具体的自重は、明らかに互いに異なるものである。

ところが、不動地が移動地の移動を表しているという移動関係にあつては、先に述べたように、これら2つの岩盤が質的に等しいものである。このことはつまり、これらの岩盤に凝固している自重は、共通の自重であることを示している。共通の自重、それは、互いに区別されえない自重、したがって、抽象的自重である。また、不動地には具体的自重と抽象的自重とが現象しているのではあるが、ただそれが移動を表現する限りでは、その自重は、移動地に現象している自重とは区別されえない自重（抽象的自重）である。

このように、他の岩盤による移動表現だけが、それぞれにふくまれている異なる自重をそれらに共通の、自重一般（抽象的自重）に還元するのである。

移動地や不動地はいろいろの属性を持った現物形態として存在している。それにもかかわらず、それらは自重をもつというだけで、それ以外のあらゆる属性とは無関係に等置されている。このことは逆に、両者がどのような現物形態をとるにせよ、自重という属性だけで両者が等置されていることを示している。つまり、不動地は、移動関係にあつては、移動地に凝固している自重と同じ自重の具体化したものとして

のみ認められているのであり、両者がとりうるどのような現物形態によってでも左右されないのである。したがって、移動を表現するものとしての不動地は、現物形態のままに移動を表現しうるし、また、移動地にたいして不動地が移動を表現するということは、移動地とは区別される岩盤である不動地としての現物形態をとることなしにはできないのである。ゆえに、不動地は現物形態のままに移動地の移動を表現する形態、つまり等移動形態となるのである。(7R・8L)

先には移動地と不動地の現物形態を捨象して、それらの本性である共通の自重を抽出した。それは、分析の過程であった。ここでは、それらが自重という属性だけで等置されているということから、不動地は現物形態のままに移動地の移動を表現する形態、つまり等移動形態となることを明らかにしている。

つまり、移動地と不動地とは、たんに自重という属性だけで等置されているのであるから、その関係は、それらが持つどのような現物形態とも無関係である。したがって、不動地がどのような現物形態を持っていたとしても、それで移動地の移動を表現できるのであるし、それゆえに、不動地は、移動地とは区別される現物形態である岩盤という形態をとることなしには、移動地の移動を表現する形態、つまり等移動形態にはなりえないのである。

こうして移動関係の媒介によって、不動地の現物形態は、移動地の移動を表現する形態となる。移動地が移動を表現するものとしての、自重の物質化としての不動地に関係することによって、移動地は不動地を自分の移動表現の材料とするのである。移動地は、このようにその移動を不動地の現物形態で表現されて、相対的移動形態をもつのである。(8L)

このようにして、移動地は、現物形態のままの不動地で己の移動を表現される形態、相対的移動形態をもつのである。

(2) 不動地

地すべりにあって一者が移動するものとしての形態（相対的移動形態）をとるとき、他者にひとつの移動形態、等移動形態を押しつける。(8L)

地すべりを起こしたひとつの岩盤には、2つの形態がある。それらは、相対的移動形態と等移動形態である。それらは、ひとつの岩盤での形態であるから、不可分である。それは、ちょうど、磁石の北極と南極との関係に似ている。磁石の一面が北極であるとき、他面は南極となる。地すべりが発生して岩盤の一方が等移動形態になるとき、他方は、相対的移動形態になる。

等移動形態にある岩盤が相対的移動形態にある岩盤の移動量に等しい量を表現しているという関係にあっては、前者は後者と区別されることのない、抽象的自重をもつものとして互いに等置されている。しかもそこでは、後者の移動だけが表現されているのである。しかし、移動を表現するには移動しているもので、あるいは自分自身で表現することができないのであるから、等移動形態にある前者は、相対的移動形態にある後者とは区別される自重、具体的自重の表現形態であることになる。等移動形態にある岩盤は、

具体的自重の具体化であることによって、その反対物の抽象的自重の現象形態になるのである。不動地は現物形態のまま移動の表現形態となるのである。かくして不動地は、移動を表現する形態、移動形態になるのである。(8L)

「等移動形態にある岩盤が相対的移動形態にある岩盤の移動量に等しい量を表現しているという関係にあつては、前者は後者と区別されることのない、抽象的自重をもつものとして互いに等置されている。しかもそこでは、後者の移動だけが表現されているのである。」ここまでは、先に述べてきたことの繰り返しであり、再確認である。逆に同じ事情から、こんどは不動地が移動形態になることが説明される。ただし、先には、自重という共通の属性から、不動地が現物形態のまま移動地の移動量を表現する形態（等移動形態）となり、移動地が相対的移動形態になることを示した。こんどは、すでに両者が相対的移動形態と等移動形態にあることから、その移動関係から出発して、不動地が現物形態のまま移動地の移動を表現する形態になることが示されている。

移動を表現するには移動しているもので、あるいは自分自身で表現することができない。そして、等移動形態にある岩盤と相対的移動形態にある岩盤との両者は、抽象的自重をもつものとして等置されているのであるから、前者は、その同じ抽象的自重で他者の移動量を表現できないのである。だから、そこに表現している自重は、抽象的自重ではありえず、それとは異なる自重、つまり具体的自重であることになる。等移動形態にある岩盤は、具体的自重の具体化（現象化）したものであることで、その反対物の抽象的自重の現象形態、つまり移動を表現する形態になるのである。そして、等移動形態の具体的自重が岩盤に現象化したものとして、それは不動地である。かくして不動地は、移動を表現する形態、移動形態になるのである。言い換えれば、不動地は現物形態のまま移動の表現形態となるのである。

また、等移動地として認められる岩盤は、つねに、抽象的自重の具体化したものであると同時に、それは具体的自重の表現形態である。つまり、この具体的自重が抽象的自重の表現形態になるのである。等移動地にふくまれている抽象的自重は、具体的自重の具体化したものを通してはじめて、移動地にふくまれる抽象的自重と等しいものであることが表現されるのである。ここでは、具体的自重は、ただ抽象的自重という抽象的属性をもつものとして現れているのである。つまり、等移動地が、不動地としての具体的形態としてではなく、たんに自重という一般的属性において移動地に等置されるということであり、それは具体的自重が抽象的自重の具体化したものとして、実現形態として、等置されることにほかならない。したがって具体的自重は、その反対物の、抽象的自重の現象形態となるのである。(8L-R)

等移動地として認められる岩盤とは、移動関係にある不動地、つまり、等移動地と接している移動地の移動を表現している不動地である。したがって、たんなる不動地、つまり、移動地からは離れたところに自立している不動地は、対象となっていない。それが移動地の移動を表現しているということでは、それは抽象的自重の具体化したものであり、また同時に、不動地であるということでは、それは、具体的自重の表現形態である。つまり、

等移動地として認められる岩盤は、これまで述べてきたように、移動する岩盤と共通の自重、抽象的自重の具体化したものであり、同時に、それ自身の具体的な自重の現象形態である。

しかし、抽象的自重は、それだけでは現実のものとして表現されない。先に述べたように、具体的な他者（具体的自重）を己の表現手段とすることではじめて、自己を表現できるのである。だから、この岩盤に現れた具体的な自重が、同時に抽象的自重の現象形態になるのである。このように、等移動地にふくまれている抽象的自重は、具体的自重の具体化したもの（現象形態）を通してはじめて、移動地にふくまれる抽象的自重と等しいものであることが表現されるのである。そしてここ移動関係にあつては、その具体的自重は、ただ抽象的自重という抽象的属性をもつものとして現れているのである。つまり、等移動地が、不動地としての具体的形態としてではなく、たんに自重という一般的属性において移動地に等置されるということであり、それは具体的自重が抽象的自重の具体化したものとして、実現形態として、等置されることにほかならない。したがって具体的自重は、その反対物の、抽象的自重の現象形態となるのである。

さらに、この具体的自重がすべてのものがもっている一般的な属性として、それゆえに無差別の自重のたんなる表現として認められるということは、それは、他の形態に、すなわち相対的移動形態にふくまれている自重との同等性の形態をもつということである。このように、他者との同等性の形態をもつということは、他者と同じものとしての自己を他者によって表現していることである。したがって、等移動地にふくまれる自重は、他者との関係でのみ自己を表現するという形態をもつことになる。つまり、具体的自重は、それ自身としては自立的なものであると同時に、非自立的なものとして他者との関係において自己を表現するものとなるのである。(8R)

具体的自重は、それ自身としては、自立的な存在である。それだけで存在している。しかし、ここでの詳しい考察は、等移動地にふくまれる具体的自重は、他者との関係でのみ自己を表現しうるものであることを示した。つまり、具体的自重は、自立的なものであると同時に非自立的なものである。具体的自重は、それ自身で存在しながらその他者（抽象的自重）の存在に規制されて存在しているのである。したがって、他者（抽象的自重）が存在しなければ具体的自重も存在しない。言い換えれば、それらは、対立関係にあるのである。

ここまでで、岩盤での地すべりにおける移動地と不動地との考察を終える。以下では、これまでの考察を整理し、要約している。

岩盤での地すべりについて考察してきた。この考察は、岩盤が移動地と不動地との二重物として現れていることを示した。このことは、移動関係にある移動地と不動地とはたんに差異的に区別されるだけの関係にあるのではなく、対立関係にあるためである。両者が対立関係にあるということは、移動関係の表現から導き出されるのではなく、両者の本性そのもののために対立関係にはいらざるをえなかったのだ

る。

さらにより詳しい考察は、移動関係にある移動地の現物形態はただ移動するものとして、また不動地の現物形態はただ移動を表現するものとして、認められていることを示した。ところが、移動地と不動地とは、岩盤の2つの存在形式である。したがって、岩盤自身に移動地と不動地との対立が包みこまれているのである。岩盤のこの内的な対立は、ひとつの外的な対立によって、すなわち2つの岩盤の関係によって表されるのであるが、この関係のなかでは、自分の移動が表現されるべき一方の岩盤は、直接にはただ移動するものとして認められるのであり、これに対してそれで移動が表現される他方の岩盤は、直接にはただ移動を表現するものとして認められるのである。つまり、岩盤における地すべりは、その岩盤にふくまれている移動地と不動地との対立の現象形態なのである。(8R・9L)

さらに続いて、ここでの考察結果を敷衍しながら、次の節への移行規定を述べている。

岩盤における自重の表現形態は、岩盤のどの発展段階にあっても、移動するものとしての形態、移動形態である。しかし、その移動形態を地すべりにするのは、歴史的に規制されたある発展段階、すなわちその岩盤を相対的移動形態にする自重と、その岩盤の他の形態に表現する自重とを同質のものとして表わすような地殻の発展段階だけである。堆積盆では、堆積物にふくまれる自重は、ただ沈降し圧密するものとして表現される。ところが堆積盆が反転し隆起をはじめるとともに、岩盤にふくまれる自重は、その岩盤を相対的移動形態にする自重と、他の形態にする自重とに分化する。だからこれらの自重を同質のものとして表わすことができるのは、地殻のこのような発展段階だけであることになる。そこでは、岩盤にふくまれているこれらの自重を抽象的自重に還元して、つまり自重をその岩盤の移動形態として表わしているのである。それゆえに、岩盤における移動形態は、同時に、自重の表現形態としての、単純な地すべり形態であることになる。したがってまた、地すべり形態の発展は、移動形態の発展に一致することになる。(9L)

岩盤のどの発展段階にあっても、そこに含まれている自重の移動形態は下方に移動するものとして表現されている。堆積盆にあっては、沈降し、押し固めるものとして現われていた。そして、堆積盆が反転し隆起をはじめるとともに、その自重は、その岩盤を相対的移動形態にする自重と、他の形態にする自重とに分化する。だからこれらの自重を同質のものとして表わすことができるのは、地殻のこのような発展段階だけであることになる。いいかえれば、地殻のこの歴史的に規制された発展段階にあってはじめて、岩盤は地すべりとして現象することが可能になるのである。それゆえに、岩盤における移動形態は、同時に、自重の表現形態としての、単純な地すべり形態（岩盤での地すべり）であることになる。したがってまた、地すべり形態の発展は、移動形態の発展に一致することになる。

岩盤における移動形態は、地殻表層物のなかの岩盤という特定の地殻表層物での地すべりと対応するだけであって、それ以外の地殻表層物での地すべりに対応するものではない。ある岩盤での地すべりには、その岩盤での個別的な移動形態が対応するだけである。不動地は、岩盤の移動地が相対的移動形態として表現されるという関係のなかでは、ただその岩盤での相対的移動形態に対して等移動形態をもつだけであ

る。(9L)

岩盤での不動地は、その岩盤での移動地の移動だけを表現する。

とはいえ、このような岩盤の移動形態は、その本性つまり無差別の自重にとっては制限された、不完全な表現形式であり、そのためおのずからもっと完全な表現形式に移行する。岩盤での移動形態は岩盤での地すべりに対応していた。しかし、移動形態の本性は無差別の抽象的自重であるのであるから、移動形態は岩盤での地すべりにだけ対応するのではなく、他のどのような地殻表層物での地すべりにも対応されるべきである。このような無差別の本性にとっては、その表現材料としての地殻表層物はどのような種類であってもよいのである。つまり、移動地と等移動地とがどのような地殻表層物において移動関係にはいるかにしたがって、いろいろな、しかし岩盤の移動地と等移動地とにのけると同様の、移動表現が現われるのである。ここではただ地殻表層物の種類の数によって、移動表現の数が制限されているだけである。

(9L-R)

このような岩盤での移動形態の本性は、抽象的自重である。どのような地殻表層物にも平等に、したがって無差別に表現している自重である。だから、そのような自重にとっては、ある岩盤での不動地がその岩盤での移動地の移動だけを表現しているというのは、制限された、不完全な表現形式である。このような無差別の本性にとっては、その表現材料としての地殻表層物はどのような種類であってもよいのである。つまり、移動地と等移動地とがどのような地殻表層物において移動関係にはいるかにしたがって、いろいろな移動表現が現われるのである。ここではただ地殻表層物の種類（岩盤、崩土および地すべり粘土）の数によって、移動表現の数が制限されているだけである。だから、その延伸された形で、崩土での移動表現も可能となる。

3—2 崩土での地すべり

移動地の移動は、その移動地に接している不動地で表現される。たしかに、観察や測量という人間行為は離れた不動地での移動表現を可能にする。しかし、移動地はそのような人間行為にかかわりなく移動している。そこでは、移動地の移動は、直接にそれに接している不動地で表現されているだけである。この移動関係にあつては、不動地は等移動地として機能しているのである。そしてそのような等移動地に要求される属性は、それが他の地殻表層物の移動を表現するかぎりでは、まさにそのかぎりでは、不動地でなければならないということだけである。だから、ある地殻表層物が一時的・相対的であるにせよ、不動地であることで、それは等移動地になりうるのである。(9R)

地殻表層物が等移動地であるために必要とされる属性は、その移動を表現するかぎりでは、したがって一時的・相対的であろうとも、それが不動地である、ということである。

崩土での地すべりにあつては、崩土の一部が移動する。ここでは、崩土が崩土の移動を表現している。等移動形態にある崩土が相対的等移動形態にある崩土の移動を表現しているのである。ところが、崩土はいろいろの雑多の現物形態をもっており、どの崩土によってでも移動が表現されることになる。岩塊から

なる崩土によって表現されていた移動は、つぎには、岩片をふくむ崩土によって表現されるようにである。ゆえに、この地すべり形態での移動表現は一時的・相対的であり、その移動表現は相対的である。崩土での地すべりの移動表現は、このように相対的であることによって、岩盤での地すべりの移動表現と区別される。(9R)

崩土での移動地の移動は等移動地である崩土で表現される。ところが、等移動地としての崩土は、いろいろな現物形態（地塊、岩塊や岩片を含む崩土等々）をもったままで等移動地なのである。したがって、この地すべり形態での移動表現は、その現物形態にしたがっていろいろな表現をもつ。あるときは地塊の崩土で移動を表現し、またあるときは岩片を含む細粒の崩土で移動を表現している。ゆえに、この地すべり形態での移動の表現は一時的・相対的である。つまり、絶対的に、いつもある定まった等移動地の現物形態でその移動が表現されてはいないのである。したがって、その移動表現は相対的である。この点で、いつも岩盤でその移動を表現している岩盤での地すべりの移動表現とは区別される。

なお、岩盤はどのような自然形態をもつにせよそれらが捨象されてひとかたまりのもので岩盤であった。それに対して、崩土は、ばらばらのものということで崩土である。ひとかたまりのものは、その構成成分がなんであれ、ひとかたまりである。そこでは、いつもある定まった等移動地の現物形態（ひとかたまりのもの＝岩盤）でその移動が表現されていた。しかし、ばらばらのものは、ばらばらの程度によって、いろいろのもの（現物形態）である。だから、崩土では、ばらばらの程度によっていろいろな表現をもつことになる。

……………相対的移動形態にある崩土は、それらの雑多の崩土の、したがって多様の移動表現をもつことになる。ここでは、相対的移動形態にある崩土は、無数の現物形態をもつ等移動形態にある崩土によってその移動を表現されるのである。こうして、どの等移動形態にふくまれている自重も、いずれもある相対的移動形態にふくまれている自重に等しいものとして、いいかえれば移動関係を媒介にして互いに等しいものとして現れているのであり、ここにはじめて無差別の自重としての本性が表現されるのである。

(9R-10L)

このように、相対的移動形態にある崩土は、地塊や岩塊あるいは岩片を含む崩土さらにはそれらの中間形態をふくめれば無数の現物形態をもつ崩土のどれとでも移動関係に入るるのであり、したがって、無数の現物形態をもつ等移動形態にある崩土によってその移動を表現されるのである。こうして、どの等移動形態にふくまれている自重も、いずれもある相対的移動形態にある自重に等しいものとして、いいかえれば移動関係を媒介にして互いに等しいものとして現れているのであり、ここにはじめて無差別の自重としての本性が表現されるのである。相対的移動形態にある崩土の自重つまり一者は、無数の他者（無数の現物形態をもつ等移動形態にある崩土にふくまれている自重）、どのようなものにも等しいものとして現れているのである。だから、それぞれの等移動形態にある自重どうしは、

たがい、他とは区別されない、無差別の自重である。

この関係を数学的に表現すれば、 $A=B$ 、 $A=C$ 、 $A=D$ 、……のとき、 $B=C=D=……$ である。移動関係にあつては、等移動形態にある自重（ B 、 C 、 D 、……）は、相対的移動形態にある崩土の自重（ A ）に等しいことで、無数の前者が互いに等しいものであることが表されているのである。

等移動形態の自重は、いまや明らかに、他のいろいろな、どの地殻表層物の自重とも等しいものとして表されている。すなわち、他のどの等移動地に表現されている自重も、それがどのような現物形態をもつていようと、したがってそれが岩塊状の崩土や岩片をふくむ粘性土などのどれに対象化されていようと、すべて移動地の自重に等しいとされているからである。それゆえにいまでは、移動地はその移動関係によって、ただ岩盤に対してだけではなく、地殻表層物全体に対して等移動形態を押しつけるのである。移動地は、どの地殻表層物の等移動地に対しても移動地である。同時に、地すべりの移動の諸表現の無限の列のうちに、地すべりの移動は、それが現れる地殻表層物の特殊な形態、地殻表層物のどのような現物形態にも無関係であることが示されているのである。(10L)

相対的移動形態にある自重と等しいということ、それを仲介にして、等移動形態の自重は、無差別の自重である。つまり、等移動形態の自重は、いまや明らかに、他のいろいろな、どの地殻表層物の自重とも等しいものとして表されている。すなわち、他のどの等移動地に表現されている自重も、それがどのような現物形態をもつていようと、したがってそれが岩塊状の崩土や岩片をふくむ粘性土などのどれに現わされていようと、すべて移動地の自重に等しいとされているからである。それゆえにいまでは、移動地はその移動関係によって、ただ岩盤に対して等移動形態を押しつけるだけではなく、地殻表層物全体に対して等移動形態を押しつけるのである。つまり、移動地は、どの地殻表層物の等移動地に対しても移動地である。同時に、先に述べたように、崩土での地すべりの移動の表現は無数の現物形態をもつ等移動形態にある崩土によって表現される無限の表現列をもつのであるが、そのように無限の表現列をもつということのうちに、地すべりの移動は、それが現れる地殻表層物の特殊な形態（つまり地殻表層物のどのような現物形態）にも無関係であることが示されているのである。

地すべりの第1の形態、つまり岩盤での地すべりでは、不動地である岩盤が岩盤の移動を表現している。移動した岩盤は岩盤ではなくなる。だから、この地すべりでの移動表現は一過性であり、したがって偶然的事実でありうる。これに反して、第2の形態である崩土での地すべりでは、偶然的現象とは本質的に異なる。ここでは、移動地は、無数の崩土のどれによってでも、その移動を表現される。ゆえに、偶然的関係はなくなる。(10L)

岩盤での地すべりでの移動表現は一過性であり、したがって、偶然的事実でありうる。しかし、崩土での地すべりでの移動表現は、無数に繰り返し実現されるのであるから、もはや偶然とは言えない。

岩塊をふくむ崩土も、岩片をふくむ崩土も、移動地の移動を表現するものとして、相対的に等移動地でありうる。等移動地としては、それらがどのような現物形態をもつかはいつでもよいことである。これらの崩土のそれぞれの特定の現物形態は、いまでは、他の多くのものとならんで、ひとつの特殊的な等移動形態である。同様に、いろいろな崩土にふくまれているさまざまな特定の具体的な自重も、いまでは、ちょうどその数だけの、自重そのものの特殊的な実現形態または現象形態として認められているのである。

(10R)

等移動形態にある崩土の自重は、先に述べたように、無差別の自重（抽象的自重）である。一方、等移動地としては、それぞれの崩土がどのような現物形態を持っていたとしても等移動地であり得る。だから、それぞれの崩土の現物形態は、それぞれのままで、等移動形態である。同様に、それぞれの崩土の現物形態を規制している具体的な自重も、それぞれのままで自重そのもの（抽象的自重）の現象形態である。

なお、「特殊的」なものというのは、他よりも優勢であったり他を規制したりする一般的なもの（「一般的・普遍的」）ではないものであり、同時にまた逆に、他よりも劣勢であって他の規制を受けているものでもなく、他のものと同等に並ぶひとつのものということである。

次に、これまで考察してきたこの章のまとめを述べ、次の地すべり形態への移行を準備している。

ある相対的移動形態にある崩土と他の移動形態にある崩土とが移動関係を媒介にして移動表現をもつとき、そこには、両者にふくまれている自重が共通のもの、無差別の抽象的自重であることが示されている。この表現は、対応しあう2つの崩土の関係としての表現である。そうであるがゆえに、第1に、新たな崩土が生成されるたびに、相対的移動形態にある崩土にふくまれている自重は、新たに生成した崩土とも等しいものとしての、新たな移動表現が付け加えられることになる。そのため、それによって表示される表現の列は完結することがなく、このような地すべりの相対的な移動表現は未完成である。この表現は、また、等移動地の現物形態によって規定されている。それゆえに、第2に、この表現は等移動地である崩土の現物形態が異なるたびに異なる形式の移動を表現することになり、したがって、ばらばらな、雑多な移動表現である。……………最後に、それぞれの移動が、当然そうならざるをえないこととして、この第2の形態つまり崩土による移動形態で表現されるならば、それぞれの移動表現が異なるために、それぞれの地すべりが他の地すべりとは異なるものとして区別され、どの地すべりの移動形態も他のどの地すべりの移動形態とも違った、それぞれが自立したものとして表現されることになる。したがって、それぞれの地すべりは、それぞれ独自の移動表現列をもつことになり、相対的移動表現は無限の表現列であることになる。(10R-11L)

ここでは、この章で考察してきた結果として、ある相対的移動形態にある崩土と他の移動形態にある崩土とが移動関係を媒介にして移動表現をもつとき、そこには、両者にふくまれている自重が共通のもの、無差別の抽象的自重であることが示されている。しかし、

この表現は次の点で欠陥がある。

第1に、この表現は対応しあう2つの崩土の関係としての表現である、ということから、新たな崩土が生成するたびに、新たな移動表現が付け加えられることになる。そのため、このような地すべりの相対的な移動表現はいつまでも完成することがなく、未完成である。

第2に、この表現は等移動地の現物形態によって規定されている、ということから、崩土の現物形態が異なるたびに異なる形式の移動を表現することになり、ばらばらな、雑多な移動表現である。

だから、第3に、それぞれの地すべりが他の地すべりとは異なるものとして区別され、どの地すべりの移動形態も他のどの地すべりの移動形態とも違った、それぞれが自立したものとして表現されることになる。したがって、それぞれの地すべりは、それぞれ独自の移動表現列をもつことになり、相対的移動表現は無限の表現列であることになる。

このような移動表現の欠陥は、それに対応する等移動形態に反映する。ここでは、各個の等移動地の現物形態が無数の他の特殊的な等移動形態とならぶひとつの特殊的な等移動形態である。そこには、どのようなものであれ、優勢な、あるいは規制的な等移動形態、つまり一般的な等移動形態は存在しない。だから、どの等移動地の現物形態も、それが一般的な等移動形態になりうるものとして、他のどの現物形態をも従属的なあるいは相対的な等移動形態のままにすえおこうとする。ところが同時に、どの現物形態も、いずれもが一般的な等移動形態になりうるものであるがゆえに、それらの中のどのひとつの現物形態も一般的な等移動形態になることはできない。そこには、いずれも一般的等移動形態になりえないものとして、したがっていずれも特殊なものとして制限された等移動形態があるだけである。同様に、それぞれの特殊な形態にふくまれているそれぞれの特定の、具体的な自重も、ただ、自重の特殊な、したがって尽きるところのない現象形態でしかない。自重は、その完全な、または全体的な現象形態を、たしかにこれらの特殊な諸現象形態の総範囲のうちにもってはいる。しかし、そこでは、自重は統一的な現象形態をもってはいないのである。(11L)

相対的移動表現は無限の表現列であるという移動表現の欠陥は、それに対応する等移動形態に反映する。この地すべりの形態では、地塊の崩土も粘土混じりの崩土等々どの崩土もいずれもが平等に等移動形態をとり得る。どれかひとつの崩土が他よりも優勢になったり、他を代表して、これこそが崩土での地すべりである、ということができない。どの崩土もそれぞれに同等なのである。ここではそのような優勢な、したがって一般的な崩土が存在しない。どの崩土もそのような一般的な崩土になりうるがゆえに、その中のどれも一般的なものにはなりえないのである。同様に、それぞれの崩土にふくまれる自重も、いずれも特殊な、したがって尽きるところのない、無限の表現列をもった現象形態でしかない。たしかにこれらの特殊な諸現象形態をすべてあわせてみれば、そこに、自重の完全な、または全体的な現象形態が現れている。しかし、そこでは、自重はどれかの現象形態で代表されることがなく、統一的な現象形態をもってはいないのである。

とはいえ、いろいろの等移動形態でその移動を表現される相対的移動形態は、単純な移動表現、すなわち岩盤での地すべりにみられた移動表現の引き伸ばされた総和からなっており、したがって、崩土での地すべりにみられた移動表現は、逆の関係では、前者の表現をふくんでいる。岩盤での地すべりでは、移動地は、それに対応する個別的な等移動地で移動を表現された。しかしその表現は、地すべりの無差別の本性にとっては制限されたものであり、必然的に、第 2 の形態として、他のすべての等移動地によって表現されるようになった。そこでは、他のすべての等移動地による移動表現の特殊的なものとして、岩盤での地すべりにおける岩盤での等移動地による移動表現がふくまれているのである。その必然的な延長として、こんどは、すべての移動地の移動を表現する等移動地での移動表現が可能になる。一般的なものをふくむ、より普遍的な現物形態をもった特定の等移動地での移動表現が可能になるのである。(11L-R)

崩土での移動表現は岩盤での移動表現の延長上にあり、同時に逆の関係では、崩土での移動表現は岩盤での表現をその構成分のひとつとしてふくんでいる。崩土での移動表現は、ある移動地として認められる崩土の移動をそれに対応する等移動地の崩土で表現しているものであり、したがって、それだけをみれば、岩盤での移動表現がそうであったように、単純な移動表現である。だから、崩土での移動表現は岩盤での移動表現の延長上にある。逆の関係では、崩土での移動表現は単純な移動表現の総和から成り立っており、したがって、単純な移動表現である岩盤での表現を、その一部としてふくんでいる。このことは、後に述べているように(3-4 地すべりの発展)、岩盤での移動表現から崩土での移動表現への発展関係にあることを意味している。

この発展関係の必然的な延長として、崩土での移動表現はその欠陥を克服して、一般的なものをふくむ、より普遍的な現物形態をもった特定の等移動地での移動表現が可能になる。つまり、統一的な移動表現をもつようになるのである。これは、次節で述べる地すべり粘土での地すべりで実現する。

3-3 地すべり粘土での地すべり

最初にこの節での結論的なものが示される。それは、前節での移行規定をうけて、その結果として示されているのである。

なお、これから以降で考察される「地すべり粘土での地すべり」の「地すべり粘土」は、いわゆるすべり面に薄く形成されている粘土ではなく、もっと厚く発達した粘土層のことである。どのくらいまで発達した粘土層か。それは、具体的なそれぞれの地すべりの規模で異なる。厚さの絶対的な数値は問題ではない。地すべり粘土での地すべりは、基本的には、崩土層の代わりに地すべり粘土層をもった地すべりである。

地すべり粘土での地すべりでは、その移動は地すべり粘土というただひとつの地殻表層物で表現される。したがって、その移動表現は単純である。また、その移動は、いつでも地すべり粘土という同じ種類

の地殻表層物で表現されており、その移動表現は統一的である。地すべり粘土での地すべりの移動形態は単純で共通であり、したがって一般的である。(11R)

地すべり粘土での地すべりでは、その移動は地すべり粘土という地殻表層物のただひとつの現物形態で表現される。岩盤での地すべりが等移動形態としての岩盤というただひとつの現物形態で表現されたように、地すべり粘土での地すべりの移動表現も、地すべり粘土というただひとつの現物形態で表現されており、その移動表現は単純である。また、その移動は、いつでも地すべり粘土という同じ種類の地殻表層物で表現されており、その移動表現は統一的である。地すべり粘土での地すべりの移動形態は単純で共通であり、したがって一般的である。

地すべり粘土での地すべりの移動形態が一般的であることは、上に述べたとおりであるが、以下では、地すべり粘土という現物形態にふくまれる自重、つまり地すべりの本性としての自重がどのようにして無差別の、一般的な自重であることを表現するようになるかを検討している。そのために、岩盤での自重および崩土での自重の、それぞれの表現形態の欠陥を改めて指摘し、地すべり粘土での自重が最終的な移動形態として自己を表現していることを述べている。

岩盤での地すべりの形態では、地殻表層物の現物形態は、他の地殻表層物が存在していなくても、自立して、存在しうる。しかしその移動は、他の地殻表層物によってはじめて表現される。移動は、その地殻表層物に対応する他の地殻表層物で表現されるのである。移動のしかた、移動表現は、それぞれの地殻表層物の属性、現物形態によって規制されている。それゆえにそれぞれの地殻表層物の現物形態が異なるように、その移動表現はそれぞれに異なっている。ここでは、地殻表層物にふくまれる自重は、他の形態の地殻表層物の存在によって、したがって自分自身の現物形態とは別のものであることが示される。(11R)

しかし、ここでの移動の表現は、ある地殻表層物に対してある他の地殻表層物が相対しているだけであって、個別的な、それゆえに偶然的な表現でしかない。この形態つまり岩盤での地すべりにおける移動表現の形態が実際に現れるのは、ただ、歴史的（地史的）に規制された発展段階にある地殻表層物の自重が、ときおりの偶然的な移動によって、地すべりとして現象するときだけである。(11R)

崩土での地すべりの形態にあっては、地殻表層物にふくまれる自重は、地殻表層物の移動が可能なかぎりでの他の地殻表層物で表現されることによって、どのような地殻表層物の現物形態に表されている具体的自重とも異なる、無差別の自重であることが示されている。(12L)

しかし、ここでのこの表現では、移動を表現する多数の地殻表層物が個別的に、移動する地殻表層物に対応しているだけであって、等移動形態にある地殻表層物は、互いに無媒介のものとして、特殊的な等移動形態であるにすぎない。このような等移動地は、それぞれが対等であって、ばらばらに自己を主張しているにすぎないのである。したがってここでは、まだ、地殻表層物に表される自重は、一般的な抽象的自重であることが、完全には示されていないのである。(12L)

続けて第 3 の形態である地すべり粘土での地すべり形態について、上に述べたことと

比較しながら述べている。

前の2つの地すべり形態、つまり岩盤での地すべりの形態と崩土でのそれでは、移動がひとつの他者で表現されようと、あるいは一連の多数の他者で表現されようと、それは、たんに自分自身の現物形態とは異なる他者のそれにふくまれる自重と等しいものであることが示されていたにすぎない。ところが、ここでは地殻表層物の移動は、いかなる地殻表層物の現物形態とも異なるものであることが、積極的に示されているのである。地すべり粘土の現物形態は、そのままで一般的な等移動形態をうけとるのであり、地すべり粘土の現物形態が、地殻表層物にふくまれる無差別の、抽象的自重の現象形態となっているのである。(12L)

地すべり粘土での地すべりの形態にあっては、その移動はいつも地すべり粘土で、しかも地すべり粘土だけで表現される。だから、地すべり粘土の現物形態は、そのままで一般的な等移動形態をうけとるのであり、地すべり粘土の現物形態が、地殻表層物にふくまれる無差別の、抽象的自重の現象形態となっているのである。

このようにして、地殻表層物にふくまれる自重は、自らの本性として、無差別の自重であることを積極的に表現するのであり、これ以上に完全に表現しようとするれば、自然形態をもたない自重そのものを取りださなければならない。そこには、すでに地殻表層物自身が存在しない。したがって、これが最終的な移動形態である。(12L)

地すべり粘土にふくまれる自重は、自らの本性である無差別の自重として表現されている。したがって、これが最終的な移動形態である。

3-4 地すべりの発展

これまでに、地殻表層物にふくまれる自重の表現形態である移動形態の発展について検討してきた。この移動形態の発展は、また、地すべり形態の発展に反映する。

第1の形態の地すべり（岩盤での地すべり）と第2の形態の地すべり（崩土での地すべり）とは、明らかに互いに自立している。これらはともに、対立しあう相対的移動形態にある地殻表層物と等移動形態にあるそれとの統一した形態であり、したがって地すべりの系列に属している。つまり、これらの地すべりの形態は、同一の範疇に属しながら互いに自立しているのであり、したがってこれらは対立しあう形態である。(12L-R)

これまで述べてきた岩盤での地すべりと崩土の地すべりとは、互いに他者が存在しなくても、自分自身で存在している。つまり、前者が後者によって規制されたり、あるいはその逆であるのではない。前者はそれだけで存在している。後者も同様である。したがって、これらは、互いに自立している。同時に、これらは、さきに指摘しておいたように、対立しあう相対的移動形態にある地殻表層物と等移動形態にあるそれとの統一した形態である。つまり、これらは地すべりの系列に属しているのである。

このかぎりでは、これらの地すべりの形態（岩盤での地すべりと崩土の地すべり）は、

同一の範疇に属しながら互いに自立しているのであり、したがってこれらは対立しあう形態である。

しかし、本来無差別の自重の現象形態であるという地すべりの本性からすれば、たんに対立関係にあるだけではおさまらない。

ところで、地すべりの本性が無差別であるということ、つまりどこにでも同じように発現するという地すべりの本性にとっては、第 1 の形態の地すべりは、岩盤にだけ発現するものとして、制限された形態であり、その表現形式は不十分である。それゆえに、第 1 の形態の地すべりは、より発展した形態の地すべりにまで発展せねばならないものとして、また、第 1 の形態の地すべりの等移動地がどのようなものでもありうるという点で可能的潜在的に第 2 の形態の地すべりでありうるものとして、第 2 の形態の地すべりを萌芽的にふくんでいる。いいかえれば、第 2 の形態の地すべりは、第 1 の形態のそれをその構成要素としてふくんでいるのである。だからこれらは、たんに対立関係にあるだけではなく、歴史的に先行している形態からより遅れて現象する形態へ、低次の形態から高次の形態へ、本性のもつ必然性のゆえに、内的必然的に発展する関係にあるのである。(12R)

発展関係とは、より低次の形態がより高次の形態を可能性として、また潜在的に萌芽としてふくみ、より高次の形態からみれば、より低次の形態をその構成要素の一部とする関係である。地すべりの形態にあつては、地すべりの本性のゆえに、したがって内的必然的に、第 1 の形態（岩盤での地すべりの形態）から第 2 の形態（崩土の地すべりの形態）に発展せざるをえないのである。

第 2 の形態の地すべりで認められた移動の表現形式が完結することなくかつ不統一な表現であるために不完全な表現形式であつたのに対し、第 3 の形態の地すべり（地すべり粘土での地すべり）の移動の表現形式は、その欠陥を解決している。さらに、第 2 の形態の地すべりは、その移動を種々雑多の地殻表層物を現物形態とする等移動地で表現していることから、つまり無差別にどのような現物形態をもつ地殻表層物をも等移動地とすることができるという点で、地すべり粘土をも等移動地にしうるのであり、可能的潜在的に第 3 の形態の地すべりである。そして逆の関係では、第 3 の形態の地すべりは第 2 の形態の地すべりをふくんでいるのである。第 3 の形態の地すべりは一般的なものとして、無限的そして規範的なものとして、個別の集合としての全体を完全にふくんでおり、かつ個別のたんなる集合である全体以上のものである。ここでも、第 2 の形態の地すべりから第 3 の形態のそれへ、したがってより低次の形態からより高次の形態へ、内的必然的に発展する関係にあるのである。(12R・13L)

地すべり粘土での地すべりの形態にあつては、先に指摘しておいたように、崩土での地すべりの形態にみられた移動表現の欠陥を解決している。つまり、ここでは地すべりの本性としての無差別の自重が、完全に己を表現しているのである。さらに、第 1 の形態から第 2 の形態へ必然的に発展する関係にあつたのと同様に、第 2 の形態と第 3 の形態とは前者から後者に内的必然的に発展する関係にあるのである。

3-5 移動形態の発展

地すべり形態の発展の程度は、前節で示したように、等移動形態の発展の程度に対応している。しかし、等移動形態の発展の程度は、その対立形態である相対的移動形態の発展の表現とその結果でしかないのである。(13L)

現実に眼前で現象している地すべり形態が発展することを前節で示した。そしてその際に、その発展が等移動形態の発展（岩盤から地すべり粘土へ）の程度に対応していることを明らかにした。しかし、この等移動形態の発展の程度は、その対立形態である相対的移動形態の発展の表現とその結果でしかないのである。相対的移動形態が発展した結果として、等移動形態が発展しそれに対応している地すべりの形態が進展しているのである。

第1の形態である岩盤での地すべりの移動地、つまり岩盤での相対的移動形態は、その移動を表現する岩盤を個別的に等移動形態にする。第2の形態である崩土での相対的移動形態は、その移動を表現する崩土をそれらの現物形態、岩塊状の崩土や岩片をふくむ崩土などに対応した特殊な等移動形態に対応させる。最後に第3の形態である地すべり粘土での相対的移動形態は、地すべり粘土を一般的な等移動形態にするのであるが、それは、すべての相対的移動形態が地すべり粘土を自分たちの統一的、一般的な等移動形態の材料にするからである。

地すべりの移動地、つまり相対的移動形態にある地殻表層物は、他者である地殻表層物に等移動形態を押し付けることで、自らの地すべりとしての実を示した。だから、先に述べたような等移動形態の発展は、みかけとは逆に、相対的移動形態の発展の結果でしかないのである。そして、地すべり粘土での地すべりでは、すべての相対的移動形態がいつも決まって地すべり粘土を自分たちの統一的、一般的な等移動形態の材料にするのである。

移動形態が進展するのと同じ程度で、その2つの極の対立すなわち相対的移動形態と等移動形態の対立もまた進展する。(12L)

等移動形態と相対的移動形態のそれぞれの進展を、別々に検討してきた。ここにきて、これら両者の対立関係の進展を検討することができるようになった。

すでに第1の形態もこの対立をふくんではいるが、それを固定させてはいない。ひとつの岩盤のうちに相対的移動形態と等移動形態との2つの形態が区別されているのであるが、それらのどちらが等移動形態に、したがってどちらが相対的移動形態になるかは、偶然にまかされている。(13L)

岩盤での地すべりでは、ひとつの岩盤のどこが移動地となり、したがってどこが等移動地になるかは、予め決められてはいない。地すべりが起きてみて初めて一方が移動地となり、その結果として他方が等移動地となる。だから、この対立関係は、偶然的である。

第2の形態でも、やはりただひとつひとつの地すべりの種類がそれぞれの相対的移動形態をもっているにすぎない。岩片をふくんだ崩土での地すべりは、その崩土での相対的移動形態をもっているにすぎない。

いのである。ただここでは、どの地すべりも、それぞれに対応した相対的移動形態の全系列をもちうるのである。たとえば、ある泥岩を起源とする崩土での地すべりは、その泥岩の岩塊の崩土から泥岩の小片をふくむ粘性土の崩土へと変化する相対的移動形態のひとつの全系列をもちうるのである。いいかえれば、すべての種類の崩土が等移動形態にあるからこそ、またそのかぎりでのみ、崩土での移動地自身がすべての崩土で表現された相対的移動形態をもつのである。(13L-R)

崩土での地すべりでも、たとえば、岩片をふくんだ崩土での地すべりは、その崩土での相対的移動形態をもっているにすぎないのである。相対的移動形態の数は、岩盤でのそれとは違って無数ではあるが、それでもその系列の相対的移動形態をもっているだけであり、そのかぎりでは、岩盤での地すべりが延伸されただけである。しかし逆に、このようにその系列の全系列をもちうるということは、崩土での移動地自身がすべての崩土でその移動を表現される相対的移動形態をもつのであり、そのかぎりでは、すでに偶然的事象とは異なる。

そして、第3の形態では、すべての移動地はただひとつの等移動形態で表現されている。つまり、ただひとつの形態を等移動形態にするかぎりにおいて、移動地は、一般的な相対的移動形態を与えられるのである。(13R)

そして、地すべり粘土での地すべりの形態にあってはじめて、どの移動地も、いつも地すべり粘土の等移動形態でその移動を表現される。移動地はつねにひとつの相対的移動形態、一般的な相対的移動形態を与えられるのである。

3-6 有機的全体としての地すべり

地すべりは、相対的移動形態と等移動形態との対立の統一である。しかし、地すべりをこのように規定してみても、それはあくまでも相対的移動形態と等移動形態という対等のものとの対立関係にあることを示しているにすぎない。これらの対立の統一は、対等に特殊なものとの統一であって、一般的なものによって統括された有機的連関にある全体としての地すべりではない。(13R)

これまで、地すべりを、相対的移動形態と等移動形態との対立の統一である、というように規定してきた。しかし、この統一は、対等のものどうしがたんにひとつとなっているだけであって、どちらかが優勢となって全体を地すべりとして特徴づけるという関係ではない。

このように対立する2つのものを統括し、全体を積極的に意味づけているのは、受動的なものとしての等移動形態ではなく、能動的なものとしての相対的移動形態である。相対的な移動形態が特別のものとして全体を積極的に意味づけ、統括しているのである。このようにして、対等のものとの対立の統一は、一者によって統括される有機的全体となるのである。(13R)

対等に対立しあうものを統括するものは、受動的なものではありえず、能動的なものである。だから、能動的なものである相対的移動形態が特別のものとして全体を積極的に

意味づけ、統括しているのである。

なおここで、「有機的」といっているのは、生命体という意味ではないのは当然である。一者によって全体が整合的に統括され、その一者によって全体が特徴づけられている様子を、生命体になぞらえてそのように表現しているのである。

それ自身としては等移動地とならんで有機的な連関にある全体の特殊な一側面を示すにすぎなかった移動地は、それが対立の統一の主要な側面であるがゆえに、一般的なものとして、等移動地という特殊なものをそのうちにふくむことになる。逆に、等移動地は、それが主要な側面ではないために、一般（全体）のなかに包含される特殊として位置づけられることになるのである。(13R)

対立する相対的移動形態と等移動形態とは、主要な側面である前者によって統括されたのであるが、移動地と等移動地との関係もまた同様である。

相対的移動形態と等移動形態との対立の統一としての現象形態は、相対的移動形態の現象形態としての移動地が主要な側面となるがゆえに、それは有機的全体としての地すべりとして現象するのである。(13R)

かくして、相対的移動形態と等移動形態との対立の統一としての現象形態は、相対的移動形態の現象形態としての移動地が主要な側面となるがゆえに、私たちが普通に理解しているように、移動する地殻表層物が代表となって、地すべりとなるのである。そこでは、等移動地は、目立たなくされているのである。

4 現実のものとしての地すべり

第3章では、現実現象している地すべりの3つの形態（岩盤での地すべり、崩土での地すべりそして地すべり粘土での地すべり）が、内的必然として、統一的に発展することを示した。それは、それらをその本性から、したがってそれらの自然形態を捨象して捉えることではじめて可能であった。しかし、現実には地すべりが発生するには、その本性の内的必然だけでは不十分である。現実の地すべりは、内的必然に強制されながら、外的環境からのいろいろな働きかけを通して、それを契機にしてはじめて現実のもの、したがって具体的な地すべりとなるのである。

第4章では、現実にはみられる、諸々の自然形態をもった地すべりを考察の対象としている。再び、岩盤での地すべり、崩土での地すべりおよび地すべり粘土での地すべりが取り上げられるが、そこでは、先の章では捨象した自然形態をもった、具体的なそれらとして捉え直されるのである。したがって、この章では、先人のこれまでのいろいろな研究成果が取り上げられ、それらが地すべりの本性を基準にして位置づけられる。また、現実の地すべりで見られる諸々の属性が、やはりその本性の現象形態にとっては必然的なものとして示される。この過程で、第3章では対立関係にあった相対的移動形態にある地殻表層

物と等移動形態にある地殻表層物とは、さらに発展して、矛盾関係にあることが示される。

なお、この章の解説では、先人の研究成果の大部分を省略している。必要に応じて、「地すべり論」原文を参照していただきたい。

地すべりは、地殻表層物そのものの、したがって特殊的な、現物形態に表現する自重、つまりその地殻表層物に固有の具体的自重と、どのような地殻表層物にも共通する、したがって地殻表層物の一般的な属性としての抽象的自重とをその本性としている。地すべりは、これらの対立物の統一した形態であり、いわゆる地すべりとしての傾斜地の移動は、前者から後者への転化の現象形態である。(13R・14L)

地すべりが発生するまでは、不動地が積極的な側面である。しかし、地すべりが発生してみると、能動的積極的な側面は、移動地となる。地すべりは、その本性からすれば具体的自重と抽象的自重との対立の統一した姿であるが、現実の具体的な地すべりは、前者から後者へ転化した現象形態である。

4-1 岩盤での地すべり

最初の地すべりは、岩盤に発生している。岩盤は、それが現実のものであるということによって、環境との間に相互作用をいとなんでいる。岩盤にとってそれは、風化として現れる。…… 岩盤は、環境のもつ条件に規制されて風化するとともに、風化することによって環境条件を変化させている。岩盤と環境との相互作用である。相互作用は、絶えることなく、また休むことなく、継続する。(14L)

岩盤は、造構造運動を経過したものであり、それに適応している。岩盤は、褶曲構造や断層を形成することによって造構造運動に適応した形態をもっている。そうであるからこそ、逆に、現象形態（たとえば共役な小断層）からそれらが形成された条件（造構造応力場）を知ることができるのである。それにもかかわらず、岩盤が環境との間でくりかえす相互作用は、その自然形態を通して、岩盤の諸属性の変化をもたらす。岩盤の諸属性は、その自然形態を規制していたのであるが、その自然形態をそのままにして、合理的なものとしたままで、変化する。とはいえ、それは変化が岩盤の自然形態および諸属性によって、つまり個々の岩盤毎に決定されるある限度を超えない範囲での変化である間だけである。諸属性がその限度を超えて変化したとき、変化した諸属性は、その自然形態を変革する。多少風化した程度の岩盤は、もとのままの斜面を維持しうる。しかし、もっと風化した岩盤は、浸食あるいはその他の運動によって、一般に緩斜面を形成するようになる。つまり、自然形態の変革である。(14L)

岩盤は、その生い立ちから、造構造運動の結果として、したがってそれに適応しているものとして、現れている。そのかぎりでは合理的なものである。だが、風化した岩盤にとっては、それは同時に特殊化でしかない。風化は、岩盤の自然形態を通じて、岩盤の諸属性を変化させる。限度を超えた諸属性の変化は、こんどは、その自然形態を変革する。

相互作用は、造構造運動に適応し、そのかぎりでは合理的であった岩盤の具体的形態、具体的自重の現象形態としての現物形態を特殊化したもの、不合理のものにする。それゆえに岩盤は、その形態をその現物形態にかかわりない自重、無差別の、抽象的自重の表現形式としての、相対的移動形態に転化する。具

体的自重が抽象的自重に転化するのである。岩盤の一部がこのように相対的移動形態をとることによって、他の部分を現物形態のままで等移動形態にする。相対的移動形態と等移動形態とは、一者であるときに同時に他者であることができない。したがって、この転化は、抽象的自重が具体的自重に、相対的移動形態が等移動形態に、一者が他者に、とってかわることである。(14L-R)

移動関係にあつては、相対的移動形態と等移動形態とは、岩盤の2つの存在形式である。だから、合理的であつた現物形態が特殊化したとき、つまり不合理になったとき、岩盤は、具体的自重の現象形態である現物形態を、その現物形態にかかわりない自重、無差別の、抽象的自重の表現形式としての、相対的移動形態に転化する。具体的自重が抽象的自重に転化するのである。岩盤の一部がこのように相対的移動形態をとることによって、他の部分を現物形態のままで等移動形態にする。いわゆる岩盤地すべりの発生である。この転化は、抽象的自重が具体的自重に、相対的移動形態が等移動形態に、一者が他者に、とってかわることである。

このように一者が他者に、とってかわる、ということはどういうことであろうか。

これら2つの自重、そしてそれらの表現形式としての2つの形態は、前章で示したように、自立的なものであると同時に非自立的なものであり、互いに他者の存在をもって自己の存在を許されるという関係、つまり対立しあう関係にあつた。しかるにここでは、それらは、他者の存在を条件として自己の存在を可能にするとともに、自己の存在の前提であり条件である他者に、とってかわることによって、つまり他者を否定してはじめて、自己を主張できるのである。ゆえに、これらの形態は、矛盾している。(14R)

2つの形態は、はじめはたんに差別的に区別されるだけの存在であつた(第2章)。それらの深い検討は、それらが対立しあうことを明かにしてきた(第3章)。そしてここでは、それらは矛盾関係にあることが示された。

岩盤と環境との相互作用は、絶えることのない、また休むことのないかわりあいである。岩盤が造構造運動に適応しているということは、相互作用にとっては、同時に特殊化である。そのような岩盤は、相互作用を契機にして、遅かれ早かれその特殊化した形態を合理的な形態つまり前者に矛盾する他の形態に転化せざるをえない。具体的自重の現象形態としての現物形態がその矛盾する他の形態、つまり抽象的自重の現象形態としての移動地に転化するのは、だから必然である。かくして、地すべりの発生は、必然である。

地すべりの発生が必然であることを明かにしている。しかし、ここでの必然性は、先に明らかにした、地すべりの本性からの必然性(内的必然性)とは異なる。岩盤は、環境との相互作用、風化によって、それを契機にして、一方の形態からそれとは矛盾している他方の形態に転化する。この契機が絶えることなく、また休むことなく続くのであるから、つまり契機が必然であるから、この転化もまた必然である。

ところで、地すべりが実際のものとして実現するためには、相対的移動形態にある岩盤が自ら移動し、

地すべりとしての実を示さなければならない。岩盤の一部が移動地として実現しなければならないのである。同時に、その移動を表現するものとしての等移動形態が、その岩盤の他の部分に、その現物形態をもったままで、等移動地として実現しなければならない。同一のもののうちに、互いに矛盾する2つの形態が実現しなければならないのである。ところが、同一のもののうちでは、どの部分が等移動形態になるかは、どの部分でもそうなりうるがゆえに、あらかじめ決定することができない。それを決定するのは、ただ、ある部分が相対的移動形態として実現することによってである。地すべりが発生してみれば、ある部分が移動地となり、他の部分が等移動地となることが決定されるのである。地すべりが現実のものとして実現するには相対的移動形態が移動地として実現しなければならない。ところが、地すべりが実現してみなければ、どこが移動地となるか決定されないのである。(14R・15L)

岩盤の2つの形態、相対的移動形態と等移動形態との矛盾は、その現象形態としての移動地と等移動地との矛盾に反映している。

岩盤での地すべりは、岩盤と環境との相互作用を契機にしながら、その本質の内的必然によって発生する。それにもかかわらず、つぎの多くの見解にみられるように、地すべりは地質構造に規制されて発生しているようにみえる。(15L)

……………(原文省略)……………

このように、地すべりは造構造運動を原因としているようにみえる。ところが、造構造運動のどこを探しても、地すべりの本質としての2つの自重(抽象的自重と具体的自重)、そしてそれらの表現形態である2つの移動形態(相対的移動形態と等移動形態)をみいだすことができない。他面では、地すべりは、抽象的な造構造運動つまりどのような造構造運動にも共通であり、それゆえにそれらのどれでもない造構造運動を歴史的条件としながら、その本質としての2つの自重が互いに矛盾しあうため発生せざるをえないのである。地すべりが発生する真の原因、必然は、だから地すべりの本性そのものにあるのである。だが同時に、その地すべりの本性のゆえに、2つの移動形態のうちの一者は、岩盤と環境との相互作用を契機にして、他の形態に転化するのである。つまり、地すべりは、現実のものとして実現するには、岩盤と環境との相互作用を契機にするのである。それゆえに、あれこれの褶曲軸や断層等に現象している造構造運動は、岩石の風化を急速かつ強力に促進する(渋谷、1961)ことによって、地すべりの発生の契機(偶然)となるだけであって、地すべりの本質したがって地すべりの発生の必然にとっては、あくまでも偶然であるにすぎない。いいかえれば、地すべりの発生の必然は、2つの移動形態が矛盾しあうからにはかならないのであるが、その必然はたんなる必然であって、それが現実のものとして実現するためには、岩盤と環境との相互作用を契機にするのである。そしてその相互作用の進展の程度は、偶然にまかされている。ゆえに、地すべりの発生は、必然であるとともに偶然である。(16L)

偶然とは、一般には、「何の因果関係もなく、予期せぬ出来事がおこるさま」あるいは、「原因がわからないこと。客観的な偶然を否定する極端な決定論の立場からの主張。」(広辞苑 第4版)などのように言われる。だが、ここでいう偶然は、自分自身以外の、したがって外的な必然である。自分自身の本性からの必然が真の必然(内的必然)であり、外的な必然は、偶然である。このことを哲学辞典(森 宏一編集、青木書店)で確認してお

こう。必然性とは、「…………客観的実在すなわち自然および社会の自己発展運動にみられる内的な本質からでてくる客観的規則性・秩序・構造としてとらえる。この理解にたつてみられる偶然性とは、事物・現象の本質からではなく、他の事物・現象からの影響を受けて生ずるものとみる。………… もちろん、あらゆる偶然は原因をもっていて、因果関係に条件づけられており、客観的性格をもつものである。………… どの現象にしてもそれがもつ内的必然性によって生ずるが、しかし現象の生起は、さまざまな多数の外部的条件との関連のうちでおこなわれるのである。したがって、これらの条件の特殊な性質、限りない多様さのために、これらの条件は偶然性を生じさせるみなもとになる。このようにして、すべて現象は内的本質による必然性と外的条件による偶然性とをにないながら生じきたるのである。偶然性があらわれるには必然性をもとにしなければ起こりえないのであり、それは必然性のあらわれる現象形態なのである。そこで、偶然性の背後には必然性があって、これが自然および社会の発展過程を基本的に方向づける。」

地すべりは、その本性のために発生せざるをえないのである。一方、絶えることなくまた休むことなく継続する岩盤の風化は、地すべりの本性にとってはどうでもいいことである。しかし、岩盤の風化があると必ずその結果として地すべりが発生せざるをえないのであり、したがってそれは外的必然である。これは、たんなる契機であり、偶然である。

また、岩盤と環境との相互作用は、どこにあっても絶えることなく、また休むことなく進展する。地すべりはこの相互作用を契機にして発生するのであるから褶曲軸や断層等から離れている地域にあっても、遅かれ早かれ、地すべりは発生する。ただ、褶曲軸や断層等の周辺では、相互作用が容易にかついちじるしく進展するために、先の諸見解にみられるように、地すべりが他の地域よりも早くそして、同じことだが、多く発生しているのである。

いわゆる多発地域の問題である。同じ事情によって、褶曲軸や断層以外であっても、岩盤の風化が容易にかついちじるしく進展する地域では、地すべりが集中的に発生する。それがいわゆる多発地域になるかどうかは、その地域の広さに規制されている。

具体的自重の現象形態としての地殻表層物の現物形態は、偶然を媒介にして必然的にその矛盾物である抽象的自重の現象形態としての移動地に転化する。この移動地が地すべりとなる必然は、ただ地殻の歴史的に規制されたある発展段階、つまり沈降を続けていた堆積盆が反転し隆起した段階を歴史的条件としているだけである。地殻がこのような抽象的な造構造運動を経過することによって、地すべりが準備されるのである。(16R)

この段落は、前に述べたことを整理し、繰り返すことでつぎの検討への移行規定となっている。つぎの段落（原文省略）では、新潟県で地すべりが発生するための歴史的条件が整ったのは、南部では鮮新世であり、北部では中期洪積世であることを指摘している。

続く段落は、地すべりが発生する歴史的な契機を明らかにすることで、いわゆる多発時

代について検討している。

堆積盆の陸化とともに、岩盤と環境との相互作用、つまり一面的には岩盤の風化が進行する。とはいえ、風化は岩盤の表面からきわめてゆっくりと進行するにすぎない。そこでは相互作用の程度が弱く、地すべりは発生しない。それは、造構造運動が頂点に達し、地殻がいろいろの程度の褶曲構造あるいは断層等をもつことによって、つまり造構造運動に適応することによって、そしてその程度に応じて、促進される。ここに地すべりが現実のものとして実現するための契機が整うことになる。(16R)

だから、岩盤での地すべりは、造構造運動が頂点に達した後の洪積世末期から沖積世初期にかけて多発したと考えられる。……津田ほか(1970)はこの時代を「地すべり多発時代」とよぶことを提唱している。現在の、ときたまに発生する岩盤での地すべりは、むしろ「多発時代」のレリック(relic)というべきであろう。(17L)

4—2 崩土での地すべり

岩盤での地すべりは、岩盤の等移動形態と相対的移動形態の矛盾、したがって岩盤の矛盾にもとづいて発生する。それゆえに、岩盤の矛盾は岩盤の地すべりによって解消する。そしてその結果として形成された崩土は、その環境に適応したもの、合理的なものとして現れる。しかし、崩土と環境との相互作用は、その適応が同時に特殊化であって、相互作用の進展とともに、その現物形態が適応しがたいもの、不合理のものとなることを明らかにする。相互作用は崩土自身の漸移的な変化を通じて進展するのであるが、はじめは、その現物形態を合理的なものとしたままで進展する。崩土の変化がいかに漸移的であっても、相互作用が絶えることも休むこともないのであるから、それは累積し、遅かれ早かれ、その現物形態を不合理のものとする。内容の変化が形態と衝突するのであり、前者が後者に反逆するのである。この衝突は現物形態を他の形態に変える方向に、つまり崩土に表現する自重を具体的自重から抽象的自重に転化させ、その表現形態を相対的移動形態に転化させる方向に解決される。そうすることによって、内容は自己の変化を貫徹するのである。

適応は同時に特殊化である。内容の変化は、その形態を変化させる。岩盤の地すべりは、岩盤の矛盾によって発生し、発生することで岩盤の矛盾を解消する。その結果、岩盤を崩土にして適応する。しかし、崩土もまた特殊化して崩土内の矛盾を先鋭化する。崩土の矛盾は、崩土の地すべりで解消する。

この崩土の特殊化は、崩土と環境との相互作用を契機にしている。

崩土と環境との相互作用のうちでもっとも主要なものは、崩土と地下水との相互作用であろう。それは、一面的には、崩土の風化した範囲(風化域)の拡大として現れる。崩土には亀裂や岩片間の間隙が発達しており、降水や他からの地下水が容易に浸透しうる。崩土へのこれらの浸透水は、崩土の地下水となって崩土を軟弱にし、風化させる。……つまり、継続的なあるいは断続的な長期にわたる地下水の供給は、崩土を風化させ、あるいは崩壊させる。風化あるいは崩壊した崩土は、その内部への地下水の浸透を可能にし、反面では地下水を崩土層に固定する。これは、地下水にとっては崩土内への拡散であり、崩

土にとっては風化域の拡大である。そしてこれは、崩土と地下水との相互作用のそれぞれの一面の表現である。(17L-R)

崩土は、地下水を得て自らの風化域を拡げ、それ以前の、風化域がせまい範囲に限られていた状態に適応していた崩土の現物形態を適応しがたいもの、不合理のものにする。適応の特殊化であり、合理的なものの不合理化である。そしてこれは、崩土の現物形態の否定であり、矛盾する他の形態への転化、つまり崩土での地すべりの発生である。逆に、地下水は、このように崩土との相互作用をとおしてはじめて、地すべりが現実のものとして実現することに関与することができるのである。(17R)

崩土と環境との相互作用の主要なものとして、はじめに、崩土と地下水とのかかわりについて検討している。なお、地下水の力学的な契機（間隙水圧）についての批判的な検討は、原文の最後に「補論」で行っている（解説では、省略している）。

地すべり地の土にモンモロロナイトがふくまれていることは、古くから知られている。……

……つまり、モンモロロナイトは、その膨潤性のゆえに、それをふくむ崩土や泥岩片を破碎し、その親水性のゆえに崩土を軟弱にするのである。

しかし、同時に、それだけである。そのどこにも、相対的移動形態と等移動形態そしてそれらの現象形態としての移動地と等移動地とを見出すことができない。さらに、モンモロロナイトをふくまない崩土も絶えることなく、また休むことなく、環境との相互作用をくりかえしている。だから、モンモロロナイトの多少及び有無にかかわりなく、地すべりは、遅かれ早かれ必然的に発生する。ただ、モンモロロナイトは、その親水性および膨潤性のゆえに、崩土と環境との相互作用を促進させる。そこでは地すべりの生起が早まる。崩土中のモンモロロナイトは、この地すべり形態にあつては、地すべりの生起を早める。これは必然である。とはいえ、それは地すべりの生起を早めるだけであつて、地すべりの本性としての生起の必然性を規定するのではない。ゆえに、崩土中のモンモロロナイトは、崩土での地すべりが現実のものとして実現しなければならないというたんなる必然を、現実に表示する契機であり、偶然であるにすぎないのである。(17R-18R)

さらに、水質との関係や凍結融解の影響についても言及しているが、原文を省略する。

これらの相互作用は、しかしながら、どこでもそしてどれでも一様に進展するというのではない。相互作用の形態と進展の速さは、地殻表層物の諸属性と現物形態に、したがって個々の崩土に規制されている。それゆえに、環境や原岩の岩質等が同一とみなされる2つの地すべり地であっても、崩土の現物形態が異なることによって、それぞれ別々に、独立して、移動することになる。(19R)

各地すべり地が独立していることの説明である。

崩土と環境との相互作用が十分に進展したとき、崩土の現物形態は相対的移動形態に転化する。他面では、相互作用の進展の程度は、崩土の現物形態に規制されている。それゆえに、崩土の現物形態が相対的移動形態に転化するに際しては、崩土の現物形態に規制された相互作用の形態と期間が必要となる。こ

の期間内では、相互作用は崩土の現物形態を合理的なものとしたままで、徐々に進展する。そこでは、崩土は相対的に不動地のままである。この期間内の崩土は、だから、まったく安定しているようにさえみえる。植村（1975）が提唱している潜伏期である。かくして、崩土での地すべりには、潜伏期が必然である。同時に、同じ理由によって、この形態の地すべりは、必然的に、間歇的地すべり（小出、1955）であり、不定期移動型地すべり（中村・白石、1973）である。（18R-19L）

現実の地すべりが間欠的であったり不定期移動型であることの、地すべりの本性からの説明である。

相互作用の進展が崩土の現物形態に規制されているということは、相互作用が、同一の崩土であつてもその現物形態の差異（たとえば崩土にふくまれる泥岩片の大小あるいはその量の違い）によって局部的差別的に進展することでもある。崩土は局部的に特殊化し、局部的な地すべりを生起する。崩土は局部的に特殊化し同時に不合理のものとなるとともに、その矛盾つまり特殊化は合理化であるとともに不合理化であるという矛盾の解消つまり不合理のものの適応化をくりかえしながら、全体的に適応化する。しかし同時に、この適応化は全体的により均一な崩土を準備するのであり、全体的な特殊化のための条件をつくりだすのであつて、遅かれ早かれ、崩土全体に新たな矛盾をもたらす。つまり、より規模の大きい、全体的な地すべりを生起させるために、いったんは局部的な矛盾を解消するのである。（19L）

ひとつの地すべり地にあつては、崩土は、部分的な地すべりを繰り返しながら、ますます細粒になり、同時に均一化していく。その結果として、崩土全体でのより規模の大きい、全体的な地すべりを生起させる。

これは、同時に、次に述べる地すべり粘土での地すべりへの移行である。そして、この移行を次の3つの段落で説明している。

この形態の地すべりは、いろいろの雑多の現物形態をもつ崩土によってその移動を表現されている。崩土での相対的移動形態は、いろいろの雑多の現物形態をもつ等移動形態でその移動を表現されるのである。相対的移動形態は、移動関係にあつては、その本質においてそれらの雑多の等移動形態のどれとでも等置されると同時に、それらのどれとも等置されない。ゆえにここでは、とにかくも、相対的移動形態は等移動形態とは異なるものであることが表現されている。（19L）

相対的移動形態は、その本質から言えば、雑多の等移動形態のどれとも等しいものとして表現されるのであるが（そうであるから、崩土での地すべりはどのような等移動地によってでもその移動を表現されているのである）、そのどれかひとつの等移動地だけで表現されているのではない。だから、ここでの相対的移動形態は、等移動形態とは別のものであることになる。

とはいえ、それが等移動形態とは異なるものとして区別されるのは、諸々の、雑多の現物形態を直接に等移動形態にするかぎりでのことある。つまり、相対的移動形態は、まだ地殻表層物の現物形態にかかわりのない等移動形態を受けとっていないのである。そのような一般的な等移動形態で移動を表現される相対的移動形態—一般的な相対的移動形態—の必然性は、生起する地すべりの数とそれを表現する等移動形

態の多様性が増大するにつれて発展する。(19L)

一般的な等移動形態で移動を表現される一般的相対的移動形態への必然性は、崩土での地すべりが繰り返すことで増大する。

崩土が環境と相互作用をくりかえすことによって、その構成要素である岩塊は小礫となり、小礫は岩片へ、岩片は粘土へと変化する。この過程は地すべりの有無にかかわらず進行する。しかし、地すべりによる機械的な破碎作用は、この過程の進行をいちじるしく促進する。たび重なる地すべりの生起は、その移動を表現する等移動形態にある崩土に多様性を与えるとともに、それらのどれでもないただひとつの等移動形態、いわゆる地すべり粘土を現物形態とする等移動形態を発生させないではおかないのである。(19L・R)

4-3 地すべり粘土での地すべり

岩塊から粘土へと崩土が発展するにつれて、はじめは、たまたま形成された地下水脈を中心に局部的差別的に進展していた相互作用は、のちには、湿潤域の拡大と崩土の細粒化にともなう含水比の増大によって、第1に、より広い範囲にわたって一様に進展するようになり、第2に、容易に進展するようになる。崩土の延長としての地すべり粘土にあっては、この傾向はより顕著になりかつ固定される。地すべり粘土では相互作用の進展が容易になり、それを契機としている等移動形態から相対的移動形態への転化が不断に可能となるのである。ところが他面では、この転化が可能となるためには、地すべり粘土が等移動形態になればならない。つまり、この転化は、相対的移動形態から等移動形態への転化を前提としているのである。(19R)

地すべり粘土では、地すべりが広範囲にかつ容易に発生する。つまり、地すべり粘土では相互作用の進展が容易になり、それを契機としている等移動形態から相対的移動形態への転化が不断に可能となるのである。しかしそのためには、その転化の前に、まず逆の転化、相対的移動形態から等移動形態への転化を前提としているのである。なぜなら、この相対的移動形態から等移動形態への転化がなければ、等移動形態から相対的移動形態への転化が無いのは自明である。

等移動形態から相対的移動形態への転化、つまり地すべりの生起によって、地すべり粘土にみられる具体的自重と抽象的自重との矛盾つまり地すべり粘土の矛盾が解消される。したがって、これの逆の転化は、この転化の完了とともに実現する。それゆえに、地すべり粘土では、相対的移動形態から等移動形態への転化とともに、それを前提にしているその逆の転化が不断に生じている。等移動地は容易に移動地に転化し、移動地はまた不断に等移動地に転化しているのである。いいかえれば、この形態の地すべりは、不断の移動とその停止の繰り返しの結果として必然的に、継続型の地すべり（高野、1960）である。

…… 間歇的な移動と継続的な移動とは、それぞれ第2の形態の地すべり（崩土での地すべり）と第3の形態の地すべり（地すべり粘土での地すべり）の属性であり、地すべりの実体がそれぞれの形態を得て現象する際の実現形態なのである。(19R・20L)

その結果、この形態の地すべりは、まず、継続型の地すべりである。

崩土での地すべりでは、崩土が雑多の現物形態をもつために、地すべりはそれぞれの崩土の現物形態にしたがって生起すること、つまり地すべりの生起にとって崩土の現物形態が規制的支配的な契機であることが明らかであった。ところが、地すべり粘土での地すべりでは、地すべり粘土がどこでも均質であり一様の現物形態をもつために、もっぱら環境が主要な契機であるかのようなみかけを呈する。ここでも地殻表層物の現物形態が規制的支配的な契機であるにもかかわらず、そのことが隠されており、表に現れてこないのである。それゆえに、高野（1957）や岩永（1963）が指摘しているように、地下水の増加をもたらす降雨が地すべりの生起、つまり等移動形態から相対的移動形態への転化と密接な関連を示すのである。かくして、この形態の地すべりは、融雪季や梅雨季などの豊水期に継続的に移動し、渇水期にはその移動は非継続的になり、ときには停止する。季節的移動型地すべり（中村・白石吉信、1973）である。（20L）

そして、この形態の地すべりは、地すべり粘土がどこでも均質であり一様の現物形態をもつために、見かけの上でももっぱら環境が主要な契機であるかのようになる。そのために、これは季節的移動型地すべりである。

4-4 条件

これまでは、地殻表層物と環境との相互作用を、地すべりが実現するための契機として捉えてきた。この契機は、その限りでは、その契機が満たされたときに必ず地すべりが実現するというものではなかった。そこにはまだ、地すべりが実現しないかもしれないという偶然であることがありえた。契機と地すべりの本質とは、互いに自立しているものであり、無関係である。ここからは、この契機について検討し、たんに必然であったものを現実のものに実現する必然、つまり条件を明らかにしようというのである。

地すべりはその本性のために必然的に発生せざるをえないのであるが、それは造構造運動を歴史的前提としているかぎりにおいてである。ところが、一見すると、かならずしも造構造運動を歴史的前提していないようにみえる。

西田・岩松（1975）及び西田（1975）は、地すべりの発生に際しては地質構造が主因になる場合と岩質が主因になる場合があると述べている。また、望月（1968）も地すべりをおこしやすい岩質の岩石が主であって、それとの構造線とのからみ合いが問題であるという地すべりの例を報告している。

これらの指摘によれば、造構造運動を前提にしない地すべりの例があることになる。しかし、岩質を主因としている地すべりであっても、その岩盤はすでに堆積盆から反転しているのであり、造構造運動をうけている。そこではすでに暗黙のうちに、無意識のうちにであろうとも、岩盤が造構造運動をうけていることを承認しているのである。そしてこの造構造運動は、地殻表層物に表現している自重が同質のものとして現れるための条件としての運動である。したがって、この造構造運動は、堆積盆が反転し隆起する運動そのものであり、その運動の結果がどのような地質構造として現象するかどうでもよいという一般的な、そして具体的な現象形態を捨象した、それゆえに抽象的な造構造運動である。このような造構造

運動が地すべりの歴史的前提としての造構造運動である。

他方では、地すべりの主因あるいは副因としての造構造運動は、その結果として具体的な現象形態である特定の断層や地質構造をもたらす造構造運動、いわば造構造運動の具体的な側面、具体的な造構造運動をいうのである。(20L-R)

先に述べた地すべりの歴史的前提としての造構造運動は、あれこれの具体的な造構造運動ではなく、むしろそれらの具体的な現象形態を捨象した、抽象的な造構造運動である。そして、地すべりの発生に地質構造が主因になるというときの造構造運動は、特定の地質構造を結果とする造構造運動、具体的な造構造運動である。

地すべりの主因あるいは副因は、地すべりが発生する必然にとっての主因あるいは副因ではありえない。なぜならば、地すべりの発生は、あくまでも、地すべりの本性のゆえに必然なのであり、その本質の表現形態としての岩盤の2つの形態つまり相対的移動形態と等移動形態とが互いに矛盾しあうために、互いに他者に、とってかわることによってはじめて自己を主張できるという事情によってもたらされるからである。この必然のどこにも、主因が、したがって副因も存在しえない。それらが存在しうるのは、岩盤の矛盾しあう2つの形態の一方が他の形態に転化する際の契機である岩盤と環境との相互作用をどれがより促進させるかという、そのかぎりでのことである。ある場合には開口した断層が、あるいは造構造運動による潜在的な破碎作用が相互作用を促進し、他の場合には岩質がそれを促進するという、そのかぎりでのことである。これらは地すべりの現実的な発生を促進させるだけであって、発生は必然を支配し規制するものではない。それゆえに、これらは、地すべりの発生は必然にとっては偶然である。(20R-21L)

地すべりの発生は、地すべりの発生は必然（地すべりの本性）にとっては偶然である。

地すべりは、抽象的な造構造運動を歴史的前提として必然的に発生するのであるが、その現実のものとしての実現に際しては、地質構造に現象する具体的な造構造運動を主要な契機とし、岩質を副次的な契機とする場合と、その逆の場合があるのである。これらは、発生することが必然であった地すべりが現実のものとして実現する契機として、いいかえれば、必然の現実化を媒介する偶然として、主因となりあるいは副因となるのである。(21L)

具体的な造構造運動は、地すべりが発生する契機（偶然）としてだけで、主因であったり、副因であったりするものである。

これらの具体的な造構造運動や岩質だけではなしに、モンモリロナイト類の粘土鉱物も、大塚・小野寺（1975）が岩石のいちじるしい強度低下の条件として示した岩石の分離面への水の侵入も、そして地下水の量や質も、いずれも地すべりの本質にとっては偶然である。とはいえ、これらは地殻表層物と環境との相互作用を促進し、地すべりの生起を早める。これは必然である。これらは、たんに必然であったもの、したがって可能的・潜在的であったものを現実のものに転化させる。そういう必然をもった偶然である。いいかえれば、これらは、これらとは別個のもとして自立している地すべりの本質にはたらきかけ、その

本質を現実のものに転化させるのである。つまり、これらの契機は、たんに必然であったものを現実のものにするための条件なのである。(21L)

地すべりが発生するための条件とは、それ自身は偶然であるが（というのは、地すべりの本質とは別のものであるということである）、それが地すべりの本質にはたらきかけると、かならず発生せざるをえない、そういう必然をもった契機である。ここではじめて、これまでにはたんに偶然とだけ捉えられていた契機が、本質に働きかけることでその本質を必ず現象させるもの、つまり条件となったのである。このように、現実の地すべりは、現実の条件を得て歴史的必然となる。

これらの条件が、抽象的自重をもつかぎりでの地殻表層物に、その現物形態をとおしてはたらきかけ、地すべりの本質をして自ら積極的に発現させるのである。(21L)

……… 地すべりの条件は、考察の対象とする地すべり群の大きさに対応して異なるのである。いいかえれば、それぞれの大きさの地すべり群は、それぞれに共通の条件をもつことによって、個々の地すべりを最小の単位として、より小さい地すべり群からより多くの地すべり地を統括したより大きい地すべり群にいたる、いくつかの階層を形成しているのである。

階層の大きさと数は、それに対応する条件の内容と数によって規制されている。………

個々の地すべりの階層つまり第 1 の階層での地すべりの条件は、それぞれの特定の地すべりと個別に対応しており、他の地すべりの条件から独立している。とはいえ、この階層の条件は、第 2 の階層の条件である地質構造に規制されている。たとえば、第 1 の階層での条件としてのある地すべり地での、したがって特定の *flexural fold* は、より広域の *flexural fold* の一部でしかないのであって、地質構造上の位置や地質構造の性格によって規制されている。同じ造構造運動であっても、地質の物性が異なることによって具体的地質構造に差異が生ずる。つまり、第 1 の階層の条件は第 2 の階層の条件によって、より小さい階層の条件はより大きい階層の条件によって規制されているのである。

逆に、地質は地質構造をもち、地質構造は特定の地質構造、特定の *flexural fold* や特定の断層をともなって現れる。より大きい階層での条件は、より小さい階層での条件をその構成要素としてふくむことによって制約されているのである。かくして、それぞれの階層での条件は、自立しているとともに相互に制約しあうものとして、非自立的である。(21R-22L)

このように、地質や地質構造を条件とする地すべりは、第 3 の階層や第 2 の階層に属する地すべりである。他方では、予測や対策の対象となる地すべりは、多くの場合、個々の地すべり、つまり第 1 の階層に属する地すべりである。それゆえに、西田・岩松（1975）が指摘しているように、地すべりの契機を地質あるいは地質構造に求める態度で直ちに地すべりの予測や対策の問題を解決しようとすることは、迂遠ではないとはいいい難いのである。もっとはっきりいえば、無理なのである。(22L)

なお、黒色泥岩層が条件となりうるという理由によって同時に、ただその逆の面として、黒色泥岩層

が分布していない地域では、それにかわって他の地質が条件となりうる。福本（1978）が示しているように、地域によって条件が異なるのである。（22L）

地すべりの条件は、地すべりの発展段階に対応して交替する。たとえば、岩盤での地すべりでは亀裂が、崩土での地すべりでは粘土鉱物がそして地すべり粘土での地すべりでは地すべり粘土の含水能が、それぞれの主要な条件でありうるようにである。この交替は、条件が地すべりの本質に作用するには地殻表層物の現物形態を通してするほかないのであるから、現物形態が異なるために、必然である。なお、実際の地すべり地には多くの条件が存在しているのであり、それらのうちのある条件が主要な条件となり、同時にある条件が主要な条件となることによって、他の諸条件は副次的な条件となる。（22L）

条件は、あるひとつの条件が主要な条件になったとき、いつまでもそれが主要な条件のままでは限らない。先に述べたように地すべりの発展段階によって異なるし、また、対策工事の結果によっても、つまり人為的にも交替する。

先には、現実の地すべりが歴史的必然となるには、現実の条件が必要であることを明かにしたが、同時に、その条件は、歴史的に規制された一時的なものである。

……………（原文省略）……………

どの地すべりも、それらが抽象的自重の現象形態であるということによってでは、つまり一般的なものをうちにふくんだ特殊なものとしてでは、互いに区別されない。個々の地すべりは、そのように普遍的なものであると同時に、それらが生起するための主要な条件が互いに異なることによって個別的なものとして区別される。そうであるから、第 1 に、いろいろの分類が可能になるのであり、同時にしかし他面では、地すべりの本質がおおいかくされ、めだたなくされるのである。第 2 に、それぞれの主要な条件はそれぞれの地すべりの個性を反映していることになる。（22R）

個々の具体的な地すべりは、いずれも同じ本質をもつものとして同一性をもつと同時に、条件を得て現象したものとして特殊なものであり、その条件が他と異なることによって個別的なものとして互いに区別されている。個々の具体的な地すべりは、このように一般と特殊、普遍と個別をあわせもったもの、統一したものとして現実存在しているのである。（22R）

4-5 地すべり地形

次に、いわゆる地すべり地形について検討している。このいわゆる地すべり地形は、地すべりをより高次の運動形態のひとつの契機（モメント）にすることで、理解される。

いわゆる地すべり地形の存在が直ちに地すべりの存在あるいは、同じことだが、地すべりの結果である、というように一般に理解されているのであるが、はたしてそれでいいのであろうか。

地すべり地のおよそ80%は、8° から 20° の傾斜度をもつ緩傾斜地である（馬場ほか、1971；永田ほか、1974；山野井ほか、1974）。滑落崖をともしこれらの緩傾斜地は、地すべり地形として知られている。地すべり地形は、過去の地すべりで形成された地形である。それゆえに、地すべり地形は地すべりの本質の運動の必然的な結果であるようにみえる。地すべり地がこのような緩傾斜地となるのは、たしかに地すべりの必然的な結果である。とはいえ、そのことによって地すべり地が緩傾斜地になることが、地すべりの本質に属する結果であるとはいえない。

地すべりは傾斜地の傾斜度を小さくする。しかし、地すべりがなくても、緩傾斜地は形成される。つまり、傾斜地の緩傾斜地化は、地すべりをそのひとつの契機にしているにすぎないのである。だから、緩傾斜地化は、地すべりの本質にとってはどうしてもよいこと、偶然であるにすぎない。

地すべりによる緩傾斜地化の必然は、ただ、地すべりを浸食・堆積作用をはじめとする陸地を緩傾斜地化する諸運動形態のなかのひとつの特殊な運動形態として把握したときにはじめて、明らかにされる。

.....

そこでは、地すべりの歴史的な前提であった造構造運動は、たんに前提であるにとどまらず、積極的に、運動形態を持つものとして現れる。それは、地すべりをはじめとする土石流やクリープそして浸食・堆積作用などの緩傾斜地化作用をもたらす諸運動形態を能動的な運動形態とし、そうすることによって自らそれに対立する受動的な運動形態になるのである。つまり、緩傾斜地化作用をより高次の必然的な、その運動の本質に属する機能として把握するときにはじめて、その必然性が明らかにされるのである。地すべりは、そこでは、クリープなどとともに、そのような高次の運動形態の能動的な諸側面のひとつの特殊な運動形態であるにすぎないのである。（22R-23L）

実際に、頭部に馬蹄形の急崖をもった緩傾斜地で地すべり地形といわれていた緩斜面が、よくよく調べてみると旧河川の蛇行の跡であった事例は多いのである。

5 地殻表層物

これまでは、地すべりの発生と発展を地すべりの発展過程に則して考察してきた。第5章では、地すべりを地殻表層物の発展過程におけるひとつの特殊な運動形態として捉え直している。そうすることで、岩盤や崩土そして地すべり粘土が地殻表層物の発展過程に占める位置が明らかにされ、それらの必然性が示される。そして同時に、地すべりの必然性と偶然性が明らかにされる。

地すべりが発生し発展するのは、その本性のゆえに必然である。それにもかかわらず、地すべりは、地殻表層物なしには存在しえない。地すべりは、地殻表層物に現象してはじめて、現実の地すべりとなる。（23L-R）

だからこれから、地すべりの場であり材料である地殻表層物そのものを取り上げて、その発展過程を検討する。

5-1 岩盤

岩盤は地質（岩質）においても、その地質構造においても、さらに色や硬さその他の工学的性質においても、種々雑多である。それにもかかわらず、これらは岩盤である。岩盤はそれらの現物形態のどの属性にも属さないで、かつどの岩盤にも共通する属性で岩盤である。そのような属性としては、どの岩盤も全体でひとかたまりのもの、連続体であるということによって、他のいかなる諸々の属性にもかかわらず、岩盤としての挙動を示すのである。(23R)

岩盤は、初めから岩盤であったのではない。堆積盆に沈積したばらばらの泥や砂が圧密をうけ、おしかためられ、そして膠結して固化し、岩盤になる（小島、1972）。岩盤は、歴史的には、ばらばらのしたがつて不連続の泥や砂が全体でひとつのもの、つまり連続したものに転化した形態である。それゆえに、連続体としての岩盤は、ばらばらの、不連続体としての泥や砂を自己の存在条件としているのである。しかるに、岩盤が形成されてみると、そこにはばらばらの泥や砂が消滅している。連続体は不連続体を消滅させることによって自己を表現しているのである。自己の存在条件を否定することによって自己を実現するものとして、それは矛盾している。(23R)

「岩盤が形成されてみると、そこにはばらばらの泥や砂が消滅している。」といっても、もちろん、泥や砂そのものが消滅しているわけではない。次の段落で説明している。

ばらばらの泥や砂が岩盤になることによって、泥や砂が消滅したのではない。消滅したのは、それらの存在形式としての不連続性だけである。泥や砂は岩盤の構成要素として岩盤にふくまれている。いいかえれば、岩盤は矛盾しあう不連続体と連続体との統一であるとともに、後者を主要な側面としているのである。(23R)

岩盤は、泥や砂が圧密され、おしかためられそして膠結して固化したものであるとして環境に適応している。しかし、岩盤は、現実のものであるということによって、環境と相互に作用しあい、適応していたものの、合理的であったものを特殊化したもの、不合理のものにする。相互作用は、不断の、休むことのない作用である。ゆえに、適応の特殊化は必然であり、連続体は、遅かれ早かれ、不合理のものとなり、不連続体に転化する。(23R)

岩盤の現物形態が、それに矛盾する他の形態に転化するには、その契機である環境との相互作用の形式に応じて、いろいろの形態をとりうる。地表面からの風化では、岩盤は風化層を形成し、ときにはその場で土壌化にまでいたる。亀裂や節理に沿う風化が進行すると、花崗岩体にみられるように深層まで風化しマサとなることがある。また、火山岩では、ばらばらの岩片として崩れ、崖錐を形成したりする。さらに、地すべりを契機とする連続体から不連続体への転化は、崩土を形成する。ここでは、地すべりは、この転化についての偶然的なひとつの契機であるにすぎない。しかし同時に、地すべりは、岩盤を崩土に転化させる必然的な契機である。(24L)

連続体としての岩盤の矛盾は、地すべりを契機として、不連続体としての崩土に転化することによって解消する。とはいえ、他面では、地すべりが現実のものとして実現するのは、まったくの偶然にまかされている。したがって、連続体としての岩盤が不連続体としての崩土に転化するのは、偶然である。

ゆえに、岩盤が崩土に転化するのは、必然であるとともに、その現実化は偶然である。(24L)

連続体としての岩盤の矛盾は、不連続体としての崩土に転化することによって解消する。しかし、その転化が偶然であるということに、不完全さがある。

5-2 崩土

崩土は種々雑多の現物形態をもっている。それはたんに岩盤の地質（岩質）の多様性に対応する多様の現物形態であるということではなく、不連続体としての多様性をもっているということである。崩土には、地塊や岩塊状の形態をもつもの、岩片をふくむ粘土状の形態をもつものそしてそれらの間の無数の中間形態をもつものがある。(24L)

不連続体としての崩土は、連続体としての岩盤の矛盾を解消するものとして現れた。しかるに、地塊状の崩土は、全体としては不連続体でありながらも、地塊の中に連続体としての側面を残している。このような崩土は、不連続体としては不完全な表現形式であり、地塊状の崩土は岩塊状の崩土へ、岩塊状の崩土は粒状の崩土へ、より粗い崩土からより細かい崩土へ、より完全な表現形式に発展せざるをえないのである。この発展は、消極的には崩土と環境との相互作用によって促進され、積極的には崩土が不連続体としては不完全であるがゆえに生ずる崩土の矛盾を解消する運動としての崩土での地すべりによって促進される。これを地すべりの側面からみれば、あたかも地すべりが、その機能として、崩土を破碎しているようにみえる。事実は逆である。崩土は自らの発展の結果として細粒化するのであって、地すべりはその契機であり偶然であるにすぎないのである。したがって、さきに、崩土の細粒化が地すべりによる機械的な破碎作用によって促進されると述べたのは、今では厳密には、誤りである。しかしこの限界を承知した上で、一般的にいい方としてそのように述べるのは、なおも一面の事実、つまり崩土は地すべりを契機として必然的に細粒化するという事実を指摘しているものとして、その範囲では、正当ないい方であろう。(24L-R)

崩土は、地すべりを契機としながら、不連続体としての完全な表現形式である粉体にまで発展する。それは、崩土が不連続体であるというその本性によってもたらされるのであり、したがって、必然である。同時に、粉体にまで発展した崩土は、吸着水を得て結合し、連続体に転化する。崩土は、自らの発展の結果として、自らの存在条件を消滅させるのである。

かくして、崩土の発展の延長上にありながら崩土とは区別される地殻表層物、地すべり粘土が生成する。(24R)

地殻表層物の発展を、地殻表層物の自己運動としてごく簡単に述べている。これを詳細に展開しようとすれば、地すべりについて展開してきたこれまでの過程と同じことを、今度は地殻表層物について、そっくり繰り返さなければならなくなる。そのときは、地すべ

りは、地殻表層物の発展運動にとって、たんなるひとつの契機にしかすぎなくなるのは、明らかである。

5－3 地すべり粘土

崩土は地すべりを契機として発展し、発展するにつれてますます細粒になる。それは、崩土の本性が不連続体であるがゆえに必然である。崩土は粉体になることによって不連続体としての完全な表現形式を受けとる。同時にそれは、不連続体としての矛盾をあらわにする。粉体にまで発展した崩土は、吸着水を得て結合し、連続体に転化する。不連続体の矛盾は連続体で解消する。崩土の地すべり粘土への転化である。(24R)

かくして、地すべり粘土はつぎの2つの側面をもつことになる。第1に、その生成の契機が地すべりであるという側面、つまり地殻表層物と環境との相互作用を契機にしているという側面では、それは地殻表層物の風化の産物であり、したがって粘土鉱物である。第2に、地すべり粘土が地殻表層物自身の発展の結果であるという側面、つまりそれは必然的に粉体であるという側面では、それは微粒子である。だが、この2つの側面は、同一のものを別々の側面から見た結果でしかない。

地すべり粘土は、これらの質的側面と量的側面との統一であるとともに、連続体であるということで、崩土と区別されるのである。地すべり粘土は、均質の粘土だけで構成されているとはかぎらず、岩片をふくむ粘土である場合もありうる。それらの構成成分の組成にかかわりなく、ただ連続体であるということで、それは地すべり粘土である。(23R・24L)

原文では、具体的な地すべり粘土の事例（新潟県柏崎市）を述べているが、省略する。また、地すべり粘土層が生成することによって、不定期移動型の地すべりと季節的移動型の地すべりとが区別されること、さらに地すべり粘土での地すべりによってすべり面に薄い水膜が形成されることなどを、地すべり粘土の矛盾の解消という面から説明している。これらは省略する。

地すべり粘土は連続体である。しかし同時に、地すべり粘土は吸着水によるみかけの粘着力で結合しているだけであり、軟弱である。そのどこからでも、容易に切断される。そこに連続体のなかの不連続性をみることができる。地すべり粘土は、崩土の矛盾を解消するものとして連続体であるとともに、不連続体でもあるのである。かくして地すべり粘土は、直接的には連続体であることで不連続体の矛盾を解消し、間接的には不連続体の側面をもつことで連続体の矛盾を解消している。地すべり粘土は、不連続体の矛盾を解消するものとして連続体となるが、しかしそれは岩盤としての連続体であるとともに不連続体の側面をあわせもつものになることによって、崩土の矛盾とともに岩盤の矛盾をも解消しているのである。(26L)

5－4 地殻表層物と地すべり

これまで、地殻表層物の発展を、地すべりとは切り離して考察してきた。地すべりが触

れられているのは、地殻表層物の発展の契機として必要とするかぎりであった。それは、地すべりは、地殻表層物の発展にとってはたんなる契機であるにすぎなかったからである。そこで、この節では、地殻表層物の発展と地すべりの発展とのかかわりについて検討する。

地殻表層物は、地すべりを契機にしながら、しかしその独自の運動の結果として、岩盤から地すべり粘土にまで発展する。そして発展の程度は地形に反映する。

………… 地形は地殻表層物の物性に規制される。他面では、地殻表層物は、地形の変遷にかかわりなく自己の発展運動として自己を貫徹する。…………

地殻表層物の本質がその運動の現象形態として、つまり必然性の実際の形態として、地殻表層物の変化（発展）を実現するには、本質にとっては偶然であるが、しかしその実現の条件である地殻表層物の物性を媒介にしなければならず、その偶然の結果としてしかし必然的に、地殻表層物の発展の程度が地形を規制するのである。そうであるから、変化した地形を観察することによって、地すべりの材料である地殻表層物の発展階程を知ることができるのである。(26L-R)

地すべり粘土の生成とともに、岩盤での地すべりが発生する際にみられた制限、つまり地殻のある発展段階と徐々に進行する地殻表層物と環境との相互作用とが一致しなければならないという極度にせまい制限から開放される。地すべり粘土には、いつでもいくらでも地すべりが生ずる。これが、地すべり粘土が生成されることによって得た地すべりの新しい運動形態である。地すべりのくり返しが地すべり粘土を生成させた。こんどは逆に、地すべり粘土によって、地すべりがくり返されるのである。(26R)

地すべり粘土で地すべりがいくらくり返されても、その結果として生ずるのはやはり地すべり粘土である。だから、地すべり粘土での地すべりは、いつでもいくらでもくり返し生ずる。

だが、それはひとつの側面でしかない。新しい運動形態は、地すべり現象の根本矛盾そのものを解決したのではない。それが解決したのは、地すべり粘土の生成以前に地すべりがもっていた一過性あるいは間歇性という運動形態の行きづまりだけである。反対に、この新しい運動形態とともに、地すべりに内在する根本矛盾がはじめて全貌を現わす。地すべり粘土での地すべりは、いくらでもくり返し生起することによって、地すべりの生起が必然であることを明らかにするとともに、降雨や融雪水に敏感に反応し、季節的に活発化することによって、降雨や融雪水の浸透がたんなる契機（偶然）であるのではなく原因（必然）であるかのようにさえ、それほどまでに、偶然は必然的になるのである。(26R)

岩盤が地すべり粘土にまで転化する契機は、地すべりである。ところが、地すべりの生起は非常に多くのまったくの偶然にまかされている。したがって、岩盤が地すべり粘土にまで転化するのは、非常に多くのまったくの偶然にまかされていることになる。短い期間や個々の地すべりを見たときには、崩土が地すべり粘土にまで発展しないことがありうるように、そこには、かならずしも厳密な法則性が貫徹しているとはかぎらない。しかし長い期間を通してみれば、そのような地すべり地においても、遅かれ早かれ崩

土は地すべり粘土にまで発展するのであり、また、どの地すべり地にあっても崩土は地すべり粘土にまで発展するのである。ゆえに、岩盤が地すべり粘土にまで発展するのは、まったく合法則的であると同時に、それはこれらの動揺をふくんでの発展である。(26R・27L)

地すべりは生起とともに現象面から消え去り、その移動を表現している地殻表層物が残る。このため、あたかも地殻表層物が地すべりの運動・発展をひきおこしているかのようにみえる。しかし、地殻表層物の発展は地すべりを契機にしているのであり、他方では、地すべりの運動は、地殻表層物の現物形態にかかわりなく自己を貫徹する。したがってみかけとは逆に、地すべりの運動（発展）が地殻表層物の発展をもたらしているのである。(27L)

6 地すべりの消滅

これまでに、地すべりの本質を明らかにし（第2章）、その本質を展開することで地すべりの発生と発展の必然性（内的必然性）（第3章）、そしてそれらの条件を明らかにしてきた（第4章）。そして、第5章では、地すべりをより高次の運動形態（地殻表層物の発展運動）におけるひとつの契機であることを示し、地すべりの必然性と偶然性を示してきた。ここにきて、地すべりの消滅の必然性を考察するためのすべての材料が揃ったことになる。それは、地すべりを地すべりの発展系列の中だけで考察しているかぎりでは、その消滅の必然性を示すことができないからである。たんに「地すべりが消滅する」ということだけであるなら、有が無になることを宣言するだけにすぎないのである。地すべりの消滅の必然性を明らかにするのは、地すべりをより高次の運動形態におけるひとつの契機にすることによってのみ、可能となるのである。

最初の地すべりは岩盤に生じた。岩盤の現物形態は造構造運動に適応していた。だがそれは、反面では、その造構造運動以外のすべての運動にとっては特殊化でしかなく、したがって岩盤の現物形態は、造構造運動後の環境との相互作用の結果にとっては適応しえない形態である。それゆえに、岩盤の現物形態は、それに矛盾する他の形態に転化する。岩盤での地すべりの発生である。(27L)

岩盤は環境に適応することによって特殊化し、地すべりが発生するための条件をつくりだした。ところが、岩盤での地すべりは、岩盤を崩土に変えることによって、岩盤での地すべりが発生するための条件を消滅させる。(27L)

崩土は、岩盤での地すべりを消滅させる。しかしそれは、地すべりそのものを消滅させたのではない。地すべりによる新たな生成物は、新たな形態の運動を可能にする。崩土は崩土での地すべりを可能にする。そして、崩土での地すべりは、崩土を地すべり粘土に転化させることによって、自らの生起のための条件を消滅させる。

かくして地すべりは、自らの生起のための条件をつくりだすとともに、生起の結果として自らの消滅をもたらす。これは歴史的傾向であり、それゆえに必然である。(27L-R)

地すべりは、自らの生起のための条件をつくりだす。これは歴史的必然である。しかし、同時にこれは、一時的である。地すべりは、生起の結果として自らの消滅をもたらす。これは歴史的傾向であり、それゆえに必然である。

岩盤の地すべりや崩土での地すべりは、先に述べたように、生起の結果として岩盤を崩土に変えたり、崩土を地すべり粘土に変える。その結果として、岩盤での地すべりや崩土での地すべりを消滅させる。それは、歴史的傾向であり、それゆえに必然である。だが、地すべり粘土での地すべりは、生起の結果として、やはり地すべり粘土を生成するだけである。

繰り返し生ずる地すべり粘土での地すべりは、地すべり粘土を発達させる。そこには均質の厚い地すべり粘土層が形成される。この地すべり粘土層は、連続体であるために内部への水の浸透を妨げ、地すべり粘土と環境との相互作用を阻害する。そこでは、地すべりが現実には生起するための必然的な条件、つまりたんに生起することが必然であったものが現実のものとなるための条件としての環境との相互作用が阻害されているのである。(27R)

発達した地すべり粘土層は、たんに必然であった地すべりの本性が現実のものに実現するための条件である環境との相互作用を阻害する。

このことの具体的な事例は、原文の25ページ(新潟県柏崎市)に示している。原文では、たんに地すべり粘土の例として示しているのであるが、現地では、まったく地すべり(つまり、移動)が生じていない。ほかに、10m以上にもおよぶ厚い地すべり粘土層を持っていながら、まったく移動していない地すべり地(新潟県新井市)がある。

どのくらいの厚さの地すべり粘土層が形成されたときに、それは環境との相互作用を阻害するか。これは、それぞれの地すべり地の諸条件によって異なる。つまり、それぞれの地すべり地の諸条件に規制されたある一定の厚さの地すべり粘土層が形成されたときに、その地すべり粘土層は環境との相互作用を阻害する。これは地すべりの現実的な消滅である。地すべり粘土層の量的な変化が質的な変化(地すべりの消滅)をもたらしているのである。これは、弁証法でいう「量質転換」のひとつの例証である。

だがそれでは、地すべりの本性、たんなる必然としての地殻表層物の矛盾は、どこへいくのであろうか。

かくして、こんどは地すべりが消滅する。とはいえ、ここで消滅するのは、具体的な現象としての地すべりであって、地すべりの必然としての根本矛盾そのものが消滅するのではない。それは、新たな条件を得て新たな運動を展開する。そこでは、地殻表層物に表現している自重の矛盾は、地すべり形態に現象するかわりに、地形発達史における能動的側面と受動的側面との矛盾として、つまりより高次の矛盾とし

て現れ、山地解体の運動形態として現象する。この運動が地層のクリープあるいはその他のどのような形態で現象するにしても、その形態をとって移動するそれぞれの移動地は、その本質（自重）のゆえに、より低いところに移動するものとして現れる。すべての移動地がそのように移動するために結局は、すべての移動地が他よりも低いところに移動することができなくなる。それゆえに、この運動形態は、山地が平坦化するまでの過渡的な運動形態である。(27R)

地すべりは、他の運動形態（たとえば、クリープ）とならんで、より高次の運動形態（山地解体の運動形態）におけるひとつの契機に転化する。そこでは、地すべりやクリープ等は、いずれも同じ本質（自重）をもつ運動形態である。ゆえに、それらは、より低いところに移動するものとして現れる。そして結局は、この運動形態は、山地が平坦化するまで続くことになる。

「地すべり論」本論は、実質的にはここで終わる。最後に、地すべりという現象に現われている「否定の否定」のひとつの例証を、まとめている。

崩土での地すべりがその移動をいろいろの現物形態をもつ等移動地で表現することによって、岩盤での地すべりが岩盤というただひとつの形態をもつ等移動地でその移動を表現するという被制約性・偶然性が否定される。しかし次には、崩土での地すべりによって明らかにされた、どのような等移動地によってでもその移動を表現するという地すべりの広汎性・必然性が地すべり粘土での地すべりによって否定される。とはいえ、それは岩盤での地すべりのもつ被制約性・偶然性に戻るのではない。地すべり粘土での地すべりでは、地すべり粘土からなるただひとつの等移動地によってその移動が表現されるとともにそれによってすべての地すべりの移動が表現されている。つまり、地すべり粘土での地すべりは、岩盤での地すべり及び崩土での地すべりのそれぞれの性格をあわせもつと同時に、それらの不完全さを克服しているのである。(27R-28L)

先の「量質転換」の例証とともに、地すべりも結局は、他の自然現象と同様に弁証法的であることを示している。

7 おわりに

「地すべり論」を終わるにあたって、「地すべり論」全体の認識論上の解説を行っている。

これまでに、地すべりとは何かということを明らかにしてきた。しかし、これまでにどこにも地すべりの総括的な規定を与えていない。たしかに、第2章、第3章などでそのときどきの規定を与えてはいる。それらの規定は、そのときどきの認識段階に対応した規定である。(28L)

第2章では、地すべりの本質を問題にし、すべての地すべりは移動するものである、ということから、2つの自重（抽象的自重と具体的自重）を明らかにした。第3章では、地すべりは、それらの自重が現象したものとしての相対的移動形態と等移動形態との対立の

統一であることなどを示してきた。このような規定をそのときどきで与えてはいるものの、それらはその認識段階に対応した規定であって、総括的な規定ではない。

地すべりの認識は、第2章での具体的な地すべりから抽象的な地すべりへの分析、そして第3章から第6章までの抽象的な地すべりから具体的なそれへの展開・総合として進められてきた。第2章の規定はもっとも低い認識段階での規定であり、第3章の規定は第2章の規定をそのうちにふくむより高次の認識段階に対応した規定である。第3章と第4章でのそれも、やはり同様の関係にある。つまり、よりあとの規定はより先の規定をふくむ関係にあるのである。かくして、第6章の完了とともに、完全に具体的な地すべりの認識に到達したのであり、同時に、ここで得られた地すべりはそれまでのすべての内容をふくむもっとも豊かな規定をもった地すべりである。(28L)

地すべりの認識は、第2章から始まって第6章まで、順次深められてきた。それは、よりあとの規定はより先の規定をふくむ関係にあるのである。したがって、第6章の完了でそれまでのすべての内容をふくむもっとも豊かな規定が与えられたのである。

なお、第2章では、「具体的な地すべりから抽象的な地すべりへの分析」が行われているのであるが、「地すべり論」の中では、隠れている。直接的な記述はない。だが、この解説書の2ページでも触れているように、具体的な地すべりについての具体的な直接および間接のすべての経験を基にしているのであり、それらの分析を通してはじめて、地すべりの本質が抉りだされているのである。

だから、地すべりの総括的な、最終的な規定を与えようとするときは、これまでに述べてきた一切をそのとおりにくり返すしかないのである。つまり、本論全体が地すべりの総括的な規定そのものなのである。(28L)

本論全体が地すべりの総括的な規定そのものなのである。途中でのあれこれの規定を抜き出して固定するとき、それは不完全な規定である。

とはいえ、この規定によって、現実中存在する個々の地すべりを、たとえそのひとつの地すべりについてであろうとも、規定しつくすことはできない。(28L)

地すべりについてのこれほどまでの総括的な規定は、これまでに与えられたことはなかったであろう。それにもかかわらず、現実の具体的な地すべりを、そのひとつであっても、規定し尽くすことはまだできない。

現実の個々の地すべりは、第1に、一般的なものそれゆえに抽象的なもの、の現象したものとして、特殊的なものである。

一般的なものは、どのような地すべりにも共通するものとしてそれらのどれでもなく、逆に、それらのどれにでもなりうるものである。ところが、現実の個々の地すべりは、それぞれのある特定の形態をもっているものであり、他のどれでもないものであって同時に他の地すべりになりえないものである。ゆえに

それは特殊な地すべりである。一般的なものは、現象することによって特殊なものになるのである。

(28L-R)

現実の具体的に存在している地すべりは、現象しているということです。一般的なものが特殊なものになっているのである。

だから、一般的な地すべりの規定を与えている「地すべり論」では、現実の地すべりのひとつといえど、それを規定し尽くすことができないのである。

とはいえ、一般的なものの規定が無意味である、というのではない。

第2に、現実の個々の地すべりがそれぞれの条件をもっていることによって、個別的なものである。

現実の個々の地すべりは、いずれも一般的なものの現象したもの、特殊なものであるということでは区別されない。それらは、同一のもの（本質）の現象したものであるからである。それらは、しかし、現象することによって区別される。それらが互いに異なる地すべりとして区別されるのは、同一のものつまり本質がその本性としての必然によって現象するに際しての条件が異なるからにほかならない。条件は本質にとっては偶然である。しかしその条件がととのったときには、本質は現象せざるをえないのである。だから、条件は、結果にとっては、必然である。(28R)

第2に、現実の地すべりは、それぞれ個別の条件をもって、現象している。その条件によって、それらが他とは区別され、個別の地すべりになるのである。

それでは、そのような現実の個別の地すべりに、「地すべり論」はどのような対応を提案しているのだろうか。筆者にとって、地すべり研究のスタート台である。これは同時に「地すべり論」を乗り越えるための、また真に批判するための実践の指針である。

現実のある地すべりは、一般的なものの現象したものとして特殊なものであり、同時に、その地すべりは他と区別されるものであり、個別的なものである。この区別は、たんに発生した場所が異なるという空間的な位置の違いではない。ましてそれぞれの地すべりに冠せられる固有名称の区別ではない。それは移動のしかたや生起した時期などの違いであり、その地すべりが現実を実現するための、地殻表層物の現物形態をはじめとする諸条件によって規定される区別である。それゆえに、現実のある地すべりを知ることとは、地すべりの本質がほかならぬその地すべりに現象するための条件を知ることであり、それは同時に、その条件が本質にはたらきかける過程、つまりその地殻表層物と環境との相互作用の歴史的過程を明らかにすることである。それは、地すべりの本質がある地すべりに現象するには、その地すべり地の歴史的に規定された条件、したがってその地すべりに特有の相互作用の過程を通じてのほかにないからである。そこでは、個々の地すべりについての全歴史が展開されるとともに、等移動形態から相対的移動形態への転化及びその逆の転化の条件、さらにその条件によって規定される個々の、特殊な地すべりの諸形態が明らかにされる。それは、個々の地すべりへのはたらきかけ、実践を通して行なわれる。(28R-29L)

「そこでは、個々の地すべりについての全歴史が展開されるとともに、等移動形態から相対的移動形態への転化及びその逆の転化の条件、さらにその条件によって規定される個々の、特殊な地すべりの諸形態が明らかにされる。それは、個々の地すべりへのはたら

らきかけ、実践を通して行なわれる。」これが、最終的な実践の指針である。

そして、認識における実践の意義が次に述べられている。

対策工事をふくめた諸々の実践は、個々の地すべりにについての知識を豊かにするとともに、一般的なものについての法則性をその細部にまでわたって仕上げる。その反面では、実践は、その個別的なものの一般的なものからの偏倚を明らかにする。そこでは、地すべりは、一般的なものであると同時に特殊なものとして、普遍的なものであると同時に個別的なものとして、それらの統一として把握される。そこに、現実の個々の地すべりにについての認識が可能となる。(29L)